

国際交流センター・国際部

2022 年度 成果報告書



目次

I. グローバルパートナーシップ形成

海外訪問	3
海外からのご来訪	4
OB ネットワーク	6
国際交流協定の締結	7
その他の活動	7

II. 学生交流

海外への学生派遣

1. 交換留学	9
2. 海外研修プログラム	9
3. 海外留学のフォローアップ	10

海外からの学生受入

1. 交換留学	13
2. 日本語・日本文化短期プログラム	13

A ³ I：アジア実問題解決駆動 AI 教育プログラム（通称：A ³ I）	14
---	----

III. 日本語教育・留学生サポート事業

日本語教育

1. 日本語 Intensive コース	22
2. 日本語補講	26
3. 日本語・日本事情教育	30

留学生サポート

1. 留学生支援・相談、文化交流	35
2. 山梨留学生就職促進プログラム（通称：IRCS）	40
3. その他の活動	54

IV. 国際化教育

G-フィロス

1. G-フィロス（グローバル共創学習室）と英語学習・留学サポート	56
-----------------------------------	----

V. 地域貢献

留学生の地域との交流	61
------------	----

小・中・高等学校への留学生派遣	62
-----------------	----

VI. 国際交流関連データ	63
---------------	----

国際化推進センター（旧 国際交流センター）長挨拶

西崎 博光
国際化推進センター長

本報告書では、第4期中期目標・中期計画に掲げる本学のグローバル化に関する目標達成に向けて、国際交流センター（2023年1月より国際化推進センター）と国際部国際企画課のスタッフが一丸となって取り組んできました。2022年度は、第4期中期目標・中期計画の1年目にあたり、新たな計画のもと、国際的な教育プログラムの設置・実施、異文化交流会などの実施、留学生（受入・派遣）の増加などを目標に活動を行ってきました。2022年度の1年間の活動内容を、Ⅰ. グローバルパートナーシップ形成、Ⅱ. 学生交流、Ⅲ. 日本語教育・留学生サポート事業、Ⅳ. 国際化教育、Ⅴ. 地域貢献、Ⅵ. 国際交流関連データの6つのパートに分けて紹介しています。

2022年度も、新型コロナウイルスの影響が残る1年でした。しかし、一部の国を除けば、国と国との往来は回復傾向にあり、現地参加での学会、交流イベント、会食などがコロナ禍前の状態に戻りつつあった一年であったと思います。日本に留学したい学生のビザへの発給の制限も大きく緩和され、多くの留学生が訪日を果たしました。

本学のグローバルパートナーシップ形成においては、本学は海外の多くの大学との関係を強化し、ウクライナのボリス・グリチェンコ・キーウ大学を始め、7つの大学（大学内の部局を含む）と新たな交流協定を締結することができました。ウクライナに関しては、不幸にも始まってしまった戦争で学びの機会を失ってしまったウクライナの大学生に対して、本学工学域の教員を中心としてオンラインコースを開講し、約500人以上の多くのウクライナの大学生がオンラインで参加し、2022年7月には修了式を行うことができました。

学生交流では、2022年度後期から海外の協定校への派遣を再開することができ、6名の学生の交換留学の希望を叶えました。オンラインでの交流も行い、アメリカのケンタッキー大学とのオンライン交流会も実施できました。一方では19名の交換留学生を本学で受け入れ、本学で採択されている世界展開力強化事業において12名（うち3名は2021年度より受入）の海外の大学生を受け入れることができました。加えて、デュアルディグリーの取得を目指して本学学生4名を長期派遣することも実現できました。このように実渡航を伴う学生間交流が活発となってきています。

日本語教育・留学生サポート事業では、留学生のための日本語教育プログラムを充実させ、留学生の日本での学びをサポートしました。また、留学生の日本での就職を促進するプログラムも展開し、彼らのキャリア形成を支援しています。

国際化教育においては、本学の特色であるグローバル共創学習室（G-フィロス）によるEnglishカフェによって、本学の学生が英語を主体的に学ぶ提供を提供し続けてきました。これにより利用した学生は、英語スキルの改善と、グローバルな視点の涵養・異文化理解を深める機会を得たものと思います。

本学に留学中の学生は、信玄公祭りに参加し、伝統的な衣装を身にまとい甲府の街を練り歩くなど、日本の文化に触れる貴重な経験をしました。また、甲府大好きまつりにおいては、留学生が自ら考案した郷土食ほうとうを地域住民に振る舞い、異文化交流を深めました。このように地域との交流も戻りつつある1年でした。

これまでの取組により、本学の外国人留学生数は2022年11月1日現在で28ヶ国275名に達しました。これは第3期中期目標・中期計画期間の末である2021年度の239人から約15%の増加となります。このように大きな成果を上げることができたのも、学長及び国際交流担当理事の強力なリーダーシップのもと、国際交流センター（2023年1月より国際化推進センター）及び国際部国際企画課のスタッフ全員が協働で献身的に対応してくださったこと、加えて各学域や附属教育研究施設の多くの皆様から多大なご支援とご協力をいただいていたことの賜であると考えております。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

I. グローバルパートナーシップ形成

本学の特色あるさまざまな研究分野を通して、新たな海外大学との交流が広がりつつあります。国際交流センター・国際部では、新たな協定締結や海外からの訪問者受け入れを通して、山梨大学の更なるグローバル化に向けて、グローバルパートナーシップの形成を推進しています。

海外訪問

学長・教職員の協定校等訪問

海外の交流協定校や、新たな協定締結の可能性があるその他の教育機関等を、学長他、関係する教職員が訪問し、グローバルパートナーシップの強化・拡大に努めています。2022年度の海外訪問について、以下にご報告します。

(1) スロベニア・リュブリャナ大学へ桜を寄贈

2022年12月7日（水）、岩崎甫 副学長がスロベニア共和国・リュブリャナ大学（University of Ljubljana : UL）を訪問し、本学から寄贈した桜の植樹式に参加しました。これは、スロベニアと日本の外交関係樹立30周年を記念する行事の一環として行われたもので、当日は、ULのGregor Majdic（グレゴール マイディッチ）学長、在スロベニア日本国大使館の松島浩道特命全権大使ほか、関係者約30名が参加しました。

式では、岩崎副学長が「春にはリュブリャナ大学の学生、教職員の皆さんに日本の国花である桜を楽しんでいただきたい。これを機に、両大の学生・研究交流がさらに深まることを願います」と挨拶しました。

ULとは平成29年9月に、島田眞路学長らがULを訪問した際、大学間交流協定を締結し、これまでに共同研究や学生交流等を推進しています。また、植樹式の前日には、ULの各学部長らと懇談会が行われ、本学から茅暁陽 副学長および奥田徹 生命環境学域長もオンラインで参加し、両大で計画する学生交流プログラムの実現に向けて積極的に意見交換するなど、有意義な会となりました。



式典前の懇談会にて

左から）岩崎副学長、UL学長、松島大使



植樹式の様子



ULの各学部長らとの懇談会

海外からのご来訪

海外の大学からのご来訪

海外の交流協定校や、協定締結を視野に交流している大学からの、山梨大学への訪問についてご報告します。交流協定校からは、学生交流のプログラム担当教職員が本学を訪れ、さらなるプロモーションに向けた打ち合わせなどが行われました。また、協定校以外にも本学の特色ある研究に興味を持つ海外の教育機関は多く、今後の協定締結に向けての訪問等がありました。

(1) 韓国・国立釜慶大学校 (PKNU) の教員が来学

2022年10月13日(木)、韓国・国立釜慶大学校(PKNU)のCHUNG Wan Young 教授とCHUNG Yeon Ho 教授が来学されました。

同校は、文部科学省大学教育再生戦略推進費「大学の世界展開力強化事業～アジア高等教育共同体形成促進～」採択事業「A3I:アジア実問題解決駆動 AI 教育プログラム」の連携校の一つであり、A3I プログラムを契機に本年3月に大学間交流協定を締結しています。

一行は、大村智記念学術館で大村智特別栄誉博士の功績や本学の歴史に触れた後、茅暁陽国際交流センター長の案内により、研究室やスマート農業プロジェクトルームを視察し、研究に関して活発な意見交換をしました。

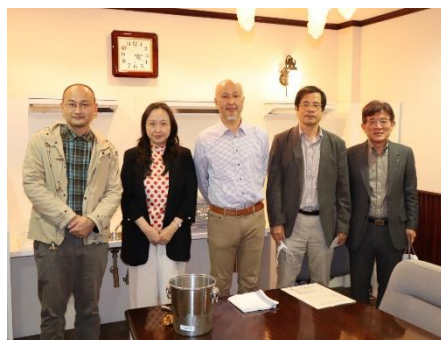
また、中山栄浩工学域長や工学域評議員らとの協議会では、釜慶大学校と本学の紹介をお互いにし、大学について理解を深めたほか、デュアルディグリープログラム※に関する意見交換をしました。

その後、中村和彦理事を表敬訪問し、今後の教員・学生交流について意見を交わした後、ワイン科学研究センターの視察や、A3I プログラムに関する打合せを実施し、プログラム推進のための更なる協力体制の強化を約束しました。

※2つの大学間で設定された単位互換制度を利用し、双方の大学の学位を取得できる制度



表敬訪問の様子



ワイン研究センター視察



大村智記念学術館を視察

(2) プリンス・オブ・ソクラ大学 (タイ) の教員が来学

2022年11月22日(火)、タイのプリンス・オブ・ソクラ大学から副学長等7名の教員が来学しました。

同大学とは2018年11月に大学間交流協定を締結し、以降も研究及び学生の交流を続けています。

ご一行は、島田眞路学長、茅暁陽国際交流センター長ら本学役員と教員・学生や研究交流について意見交換した後、大村智記念学術館を見学し、2015年にノーベル医学・生理学賞を受賞した本学卒業生の大村智博士の功績や本学の歴史等に触れました。



表敬訪問・意見交換の様子



大村智記念学術館を視察

(3) 外務省・戦略的実務者招へい事業 「西バルカン諸国・スロベニア」ご一行が来学

2023年1月30日(月)、外務省・戦略的実務者招へい事業※1により、西バルカン諸国およびスロベニア共和国から農業に関する実務者6名がスマート農業技術の研修のため、来学されました。※2

本事業は、各分野において指導的立場で活躍されている実務者のための訪日招へい制度であり、我が国の政策、文化・社会等様々な分野への理解を深め、我が国の関係者と人脈を構築し、親日家・知日家層の育成・底上げを図ることを目的としています。

研修では、岩崎 甫副学長から歓迎の挨拶があり、その後、茅 暁陽副学長(コンピュータ理工学科教授)が「匠の技術を獲得したAIとスマートグラスによるブドウの摘粒作業支援、AIを搭載した栽培支援ロボットの開発」、小谷 信司メカトロニクス工学科教授の研究室が「モモの検疫検査及び箱詰め作業等の自動化、サクランボの品質分類検査技術」、片岡 良太環境科学科准教授が「山梨県の農業—環境・土壌—、あけぼの大豆の栽培土壌環境」と、本学が取り組んでいる最先端のスマート農業技術や山梨県の農業事情をそれぞれ紹介しました。

また、本学と大学間交流に関する包括協定を締結している明治大学の橋口 卓也教授が、同大で開発された灌水と施肥を、IoTとAI技術で自動化し「高収量・高品質・省力化」に貢献する自動灌水装置「ゼロアグリ」について紹介されました。

茅研究室の学生によるスマートグラスのデモンストレーションでは、参加者は、実際にスマートグラスを装着して摘粒作業のシミュレーションを体験し、日本の最新技術に関心を寄せていました。

研修後に行われた中村和彦理事(国際交流担当)との意見交換会では、互いの国の発展のため、これを機に本学と各国の交流を深めることを約束しました。



参加者に説明する茅副学長



研修の様子



中村理事と意見交換会

(4) ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校ご一行が来学

2023年2月1日(水)、タイのラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校(Rajamangala University of Technology)から Sommai Pivsa-Art 学長、Panya minyong 学長補佐ら 28名が来学されました。同大学は、タイ国内にそれぞれ独立して運営される9つのキャンパスがある国立総合大学で、タンヤブリ校はその旗艦校です。

一行は、まず、茅 暁陽副学長(国際交流センター長)、郷 健太郎コンピュータ理工学科教授、野田 善之機械工学科教授と両大学の情報や研究者・学生の交流等について意見交換を行いました。続いて、工学部機械工学

科の研究室（伊藤 安海教授、船谷 俊平准教授、野田教授）と水素・燃料電池ナノ材料研究センターを視察しました。今回の訪問を契機に、同校との教育研究の連携が促進されることが期待されます。



懇談の様子



水素・燃料電池ナノ材料研究センターにて



Somma 学長と茅副学長

OBネットワーク

国際交流センター（2023年1月より国際化推進センター）では、本学を卒業・修了した留学生とのネットワーク形成に向け、留学生同窓会の整備を進めています。

すでに同窓会に登録している卒業・修了生に対しては、山梨大学とのつながりを継続してもらえるよう、大学広報誌である『Vine』電子版や、年末年始の挨拶状をEメールで送信するとともに、国際交流センターウェブサイトにも、Eメールと同様の内容で卒業・修了生へのメッセージを掲載するなどしています。このような海外在住の本学出身留学生とのネットワークを、本学の広報活動、海外での優秀な留学生の獲得に活用したいと考えています。



同窓生宛グリーティングカード

大学刊行物 電子版 <https://www.yamanashi.ac.jp/about/281>

国際交流センターウェブサイト <https://www.ciee.yamanashi.ac.jp/>

国際交流協定の締結

2022年度には、以下の3件の大学間交流協定及び3件の部局間交流協定を締結しました。

大学間交流協定校：

- ・2022年10月24日：ウクライナ ボリス・グリチェンコ・キーウ大学
- ・2023年2月20日：タイ マヒドン大学
- ・2023年3月6日：カンボジア 王立プノンペン大学

部局間交流協定：

- ・2022年12月6日：パキスタン・イスラム共和国 ラホール大学（医学部）
- ・2022年12月7日：マレーシア ペトロナス工科大学（インスティテュート・オブ・テクノロジー・ペトロナス）（クリーンエネルギー研究センター）
- ・2022年12月20日：カンボジア カンボジア工科大学（国際交流センター（2023年1月より国際化推進センター））
- ・2022年12月20日：カンボジア 国際大学（国際交流センター（2023年1月より国際化推進センター））
- ・2023年1月4日：カンボジア 王立プノンペン大学（国際化推進センター）

その他の活動

進学説明会実施・参加及び留学フェアへの参加

国際交流センター・国際部では、優秀な留学生をリクルートするため、毎年国内外のフェアへの参加や日本語学校、海外の大学を訪問することを通して広報活動を行っています。

2022年度は、以下3件の進学説明会又は留学フェアに参加し、本学の教育、研究上の特色、甲府市の住環境等に関する最新の情報を紹介し、地方の大学で学ぶメリットなど山梨大学の魅力をアピールしました。

- (1) 2022年度 JASSO 主催日本留学オンラインフェア：2022年7月30日（土）
- (2) Study in Japan Fair 2022, Cambodia：2022年10月14日（金）
- (3) カンボジア 絆フェスティバル：2023年2月24日（金）-26日（日）

II. 学生交流

さまざまな分野で国際的な視野を持って活躍する人材を育成するため、日本人学生の海外派遣や、各国留学生との交流事業に力を入れています。日本人学生の海外留学や海外インターンシップへの関心は年々高まっており、派遣人数も増加傾向にあります。

また、海外派遣だけでなく、留学生受入数のさらなる増加を目指し、学生訪問団の受け入れや、在籍する留学生のサポート事業にも力を注いでいます。

海外への学生派遣

1. 交換留学

新型コロナウイルス感染症の影響により、2019年度の海外派遣を最後に中止していた、本学交流協定校との交換留学（派遣）を2022年9月より再開し、以下の通り、計6名の学生を派遣しました。

国・地域	留学先大学	期間	人数
ドイツ	ドレスデン工科大学	2022年9月出発～2023年8月帰国	2名
英国	オックスフォード・ブルックス大学	2022年9月出発～2023年6月帰国	2名
米国	イースタン・ケンタッキー大学	2023年1月出発～2023年12月帰国	1名
オーストラリア	シドニー工科大学	2023年2月出発～2023年12月帰国	1名



友人たちとの食事



ドレスデンのツヴィンガー宮殿にて

2. 海外研修プログラム

例年、本学のプログラムとして、交換留学のほか、夏季・春季休暇中に語学・文化研修と、語学・文化研修に企業や学校、地方自治体でのジョブ・シャドイング（インターンシップ）が加わった海外研修を行っています。今年度の夏季研修は新型コロナウイルス感染症の影響により、現地に渡航しての研修を実施することができなかったため、オンラインにて語学・文化研修を行いました。春季研修については、現地に渡航してのプログラムを実施しました。

(1) オンライン夏季海外研修プログラム

8月30日（火）～9月16日（金）に、協定校である米国のケンタッキー大学 Center for English as a Second Language (ESL) が実施するオンラインプログラムに6名の学生が参加しました。本学学生向けの特設クラスにて、きめ細やかな指導を受け、スピーキング、リスニングを集中的に学び、コミュニケーションに必要な語学力の習得を目指しました。また、語学の授業のみならず、アメリカ文化についての授業や現地学生と交流する機会も設けられ、現地に渡航できない状況の中でも異文化交流を行うことができました。

海外研修オンラインプログラム

米国：ケンタッキー大学英語・文化研修

◆日程：2022年8月30日（火）～9月16日（金）12日間
日本時間 火曜日から金曜日 8時～10時45分
（米国時間：19時～21時45分）
※週1回の現地学生との交流：日本時間10時～11時（米国時間：21時～22時）

◆研修内容：・週約10時間のオンライン英語学習（計約30時間）
・スピーキング/リスニング授業
・アメリカ文化についての授業
・現地学生との交流（週1回）

◆経費：約11万円前後（授業料800ドル）その他別途、申請料、教材費等があります。
※経費総額は状況により変動する可能性があります

(2) 春季海外研修プログラム

2023年2月5日(日)(日本発)～3月11日(土)(日本着)に、協定校である米国のケンタッキー大学 Center for English as a Second Language (ESL)が実施するオンラインプログラムに7名の学生が参加しました。各学生の英語レベルに応じて、各国から来た学生で構成されるクラスにてきめ細やかな指導を受けます。毎日(月～木曜日)リーディング、ライティング、スピーキング、リスニングの各授業にて、コミュニケーションに必要な語学力の習得を目指しつつ、英語の授業のほか、現地の学生との交流活動も行いました。



現地学生との交流



現地学生への山梨県紹介

3. 海外留学のフォローアップ

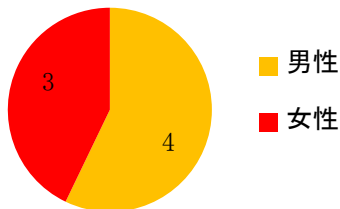
本学のプログラムで留学する学生に対して、交換留学及び海外研修プログラム共に、事前指導や帰国後のフォローアップを行っています。その一つとして、留学・研修に参加する学生を対象に、留学前・留学後のアンケート調査を行っています。異文化交流や語学学習を通じて学生にどのような変化があるのかを測ると同時に、参加者の声を聞くことによって、次年度以降の海外研修プログラムの充実を図っています。

本報告書では、春季・夏季プログラムのうちの一部プログラムから、参加学生に対し実施したアンケート結果を紹介します。

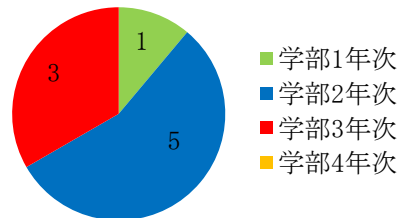
① 春季 米国・ケンタッキー大学英語・文化研修

<回答者内訳>

参加者内訳

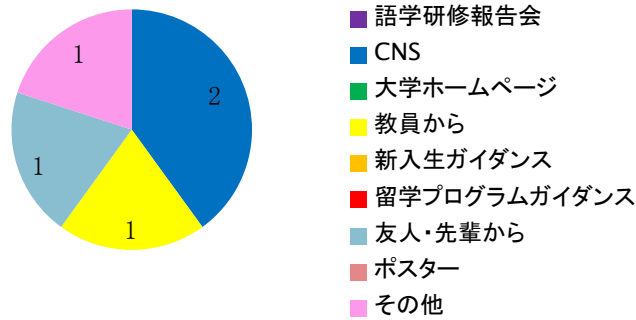


参加者学年

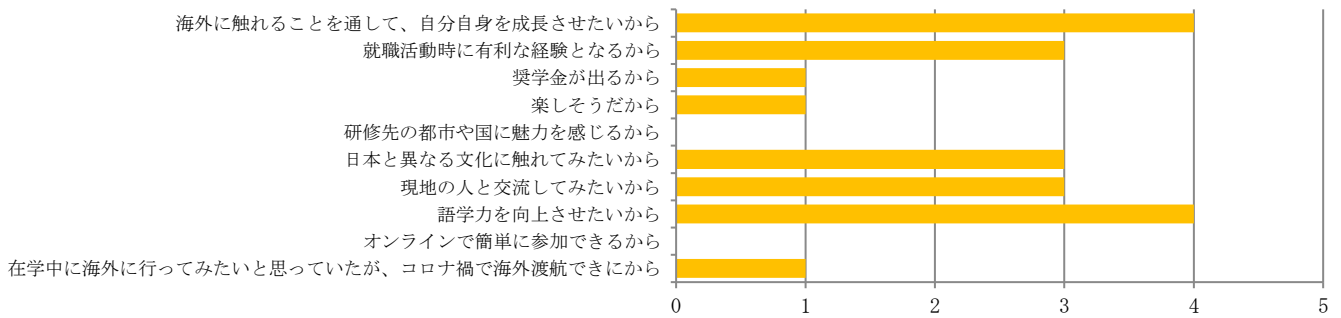


<各項目回答>

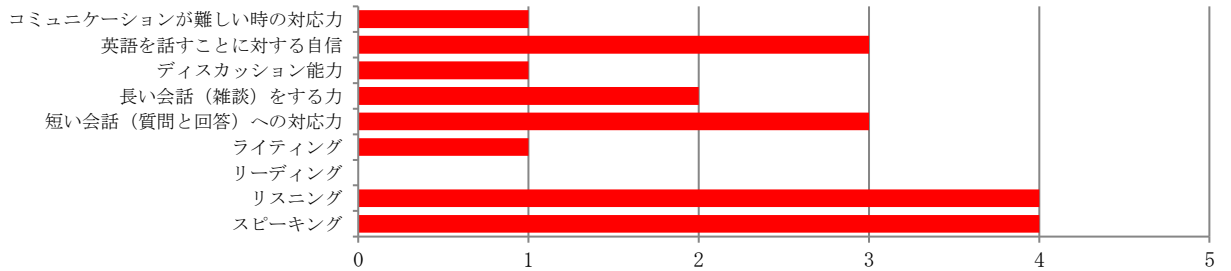
この語学研修を何で知りましたか？



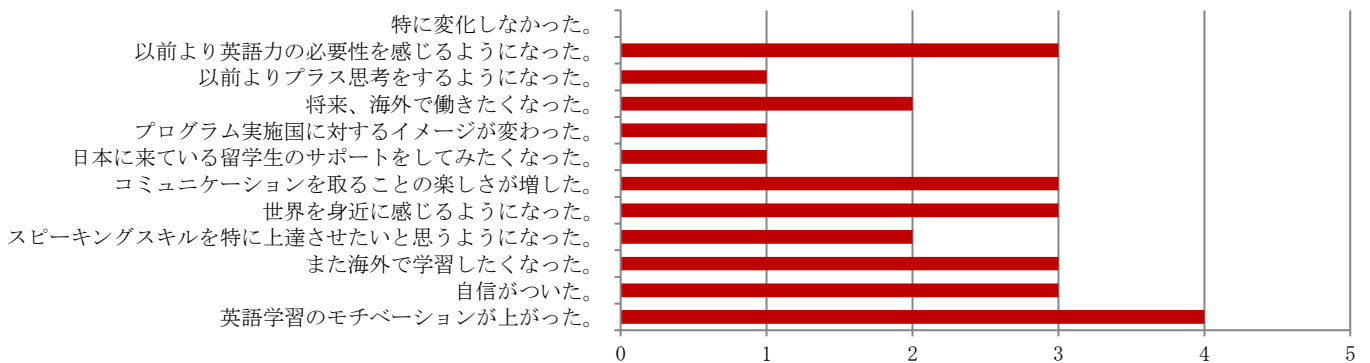
なぜ本研修に参加しようと思われましたか
(複数回答可)。



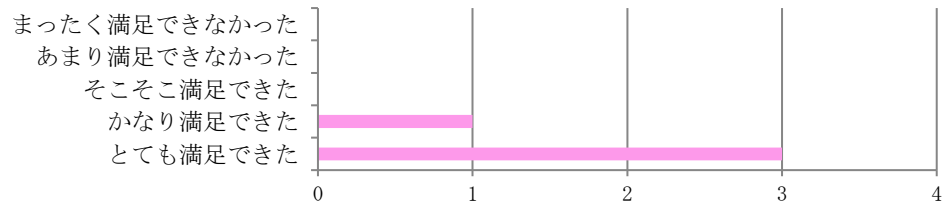
この研修で英語力の中のどのようなスキルが特に上達したと思いますか？
(複数回答可)



この研修によって、あなた自身は何か変化しましたか？(複数回答可)

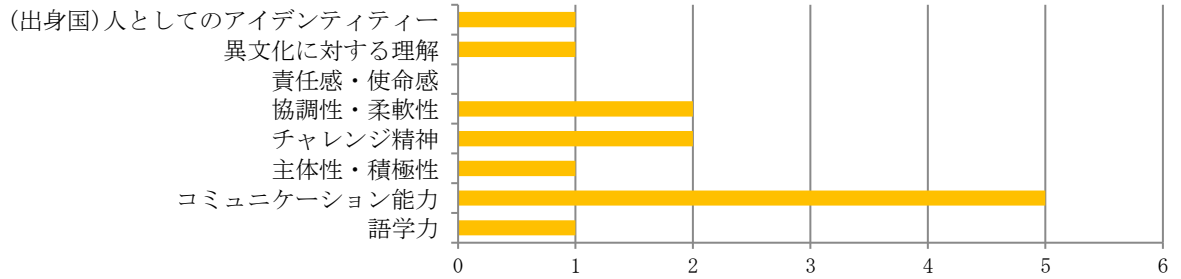


研修プログラムは満足できましたか？

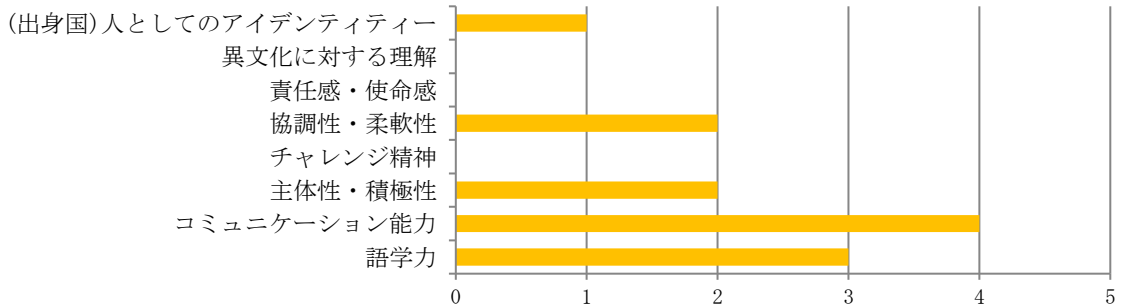


グローバル人材の条件として特に重要だと思う項目を3つ選んでください。

事前
↓
事後



グローバル人材の条件として特に重要だと思う項目を3つ選んでください。



海外からの学生受入

2022年度5月1日時点では23カ国から計231名の学生が、11月1日時点では28カ国から計275名の留学生在籍していました。

1. 交換留学

今年度の交換留學生数（2022年4月及び2022年10月留学開始）は以下のとおりでした。

国名	大学名	受入学生数
英国	オックスフォード・ブルックス大学	4
中国	外交学院	4
	杭州電子科技大學	2
	西南交通大學	6
フランス	リヨン第三大學	3

2. 日本語・日本文化短期プログラム

例年、海外の交流協定校との関係を強化し、本学の国際化を推進することを目的として、日本語授業と日本文化体験で構成される3週間の日本語・日本文化研修プログラムを7月に実施していますが、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、中止となりました。しかしながら、2023年2月にJASSOの協定受入プログラムを活用し、2月14日（火）～23日（金）の10日間の日程で、ウィンタープログラムを実施しました。本プログラムには、カンボジアのカンボジア工科大学、王立プノンペン大学、国際大学、タイのプリンス・オブ・ソンクラ大学、ドイツのドレスデン工科大学から計19名の学生が参加しました。本プログラムは、日本の大学院への進学、日本企業への就職に関心を持ってもらうことを目的として実施したもので、日本語・日本文化体験の他に、本学の工学部、生命環境学部の研究室見学、および、企業見学に参加する機会を提供しました。

A³I:アジア実問題解決駆動 AI 教育プログラム(通称:A³I エースリーアイ)

大学の世界展開力強化事業 アジア高等教育共同体(仮称)形成促進キャンパスアジアプラスプログラム

国際部では令和3年度文部科学省大学教育再生戦略推進費「大学の世界展開力強化事業～アジア高等教育共同体形成促進～」に「A³I:アジア実問題解決駆動 AI 教育プログラム」を申請し、採択されました。(実施期間令和3年度～令和7年度)

以下は令和4年度における本プログラムの活動報告です。

A³I:アジア実問題解決駆動 AI 教育プログラム

ー 活動の概要と令和4年度の取組状況 ー

1. 「A³I:アジア実問題解決駆動 AI 教育プログラム」の概要

1.1 A³I:アジア実問題解決駆動 AI 教育プログラムの背景と目的

文部科学省大学教育再生戦略推進費「大学の世界展開力強化事業～アジア高等教育共同体形成促進～」は、国際的に活躍できるグローバル人材の育成と大学教育のグローバル展開力の強化を目指し、高等教育の質の保証を図りながら、日本人学生の海外留学と外国人学生の戦略的受入を行う事業対象国・地域の大学との国際教育連携の取組を支援することを目的とし、2011（平成23）年度から開始された。

令和3年度には「アジア高等教育共同体（仮称）形成促進」として、日中韓及びASEAN地域を中心としたアジア諸国との大学間連携による教育研究プログラムの公募が行われ、本学が申請した「A³I:アジア実問題解決駆動 AI 教育プログラム」が採択された。このプログラムでは、本学、杭州電子科技大学(中国)、釜慶大学校(韓国)、ペルリス大学(マレーシア)の4大学が連携し、各大学のAI研究・教育の強み、産業界との連携ネットワーク、および地域の実践フィールドを相補的に活用することで、AI国際産学連携の新たな教育モデルを確立し、アジア諸国との架け橋となり、Society5.0やDXを牽引するAI人材の育成を目的としている。

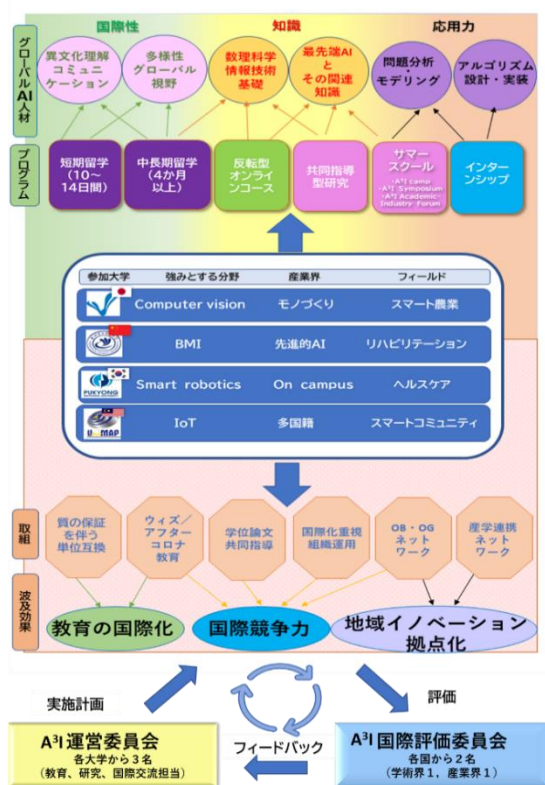


図1 本事業の概念図

1.2 人材養成目標とプログラム

日本とアジア諸国間の架け橋となって、Society 5.0 と DX を牽引できる AI 人材として、国際性、知識、応用力の3側面から、以下の6項目の素養と能力を有する人材の育成を目標とする。

1. 国際性

- ① 異なる言語や文化背景の人々と共に行動できる異文化理解・コミュニケーション能力
- ② 多様な価値観を尊重し、国際社会のニーズと枠組みを理解できるグローバルな視野

2. 知識

- ③ 強固な数理科学と情報技術の基礎
- ④ 最先端の AI 技術とその関連知識

3. 応用力

- ⑤ 分野を超えて各種の問題の本質を捉え、定式化するモデリング力
- ⑥ 問題に合わせて効率的なアルゴリズムを設計し、実装する力

以上を達成するために、多様なプログラムを提供する。具体的には、with/after コロナ時代に備え学年歴の差異を吸収した反転型オンラインコース、各国の文化に根ざし国際性を涵養する短期交流プログラム、各大学の特色ある研究・教育環境をフル活用できる長期留学、実問題解決を通して応用力を鍛えるハイブリッド型サマーキャンプ、共同研究成果と最新技術動向を共有する国際シンポジウム、産学連携を強化する産学連携フォーラム、各大学の産学連携ネットワークを活用したインターンシップ、さらに、質を伴った単位互換システムの構築により、豊かな国際性と確かな AI 技術・高度応用力を修得させるデュアルディグリープログラムである。毎年度 140 名以上の学生が参加し、5 年間 4 カ国で計 70 名以上のデュアルディグリー修了生を育成する計画である。

2. 令和 4 年度の取組状況

本事業では、2021 年度に開始し、2022 年度より本格的な交流活動を開始した。交流内容を簡単に要約すると、短期（10 日～2 週間等）の文化交流、中長期留学に伴うデュアルディグリープログラム、反転型オンラインコース、ハイブリッド型サマースクールなどを実施し、特に日本人学生が参加しやすい仕組みを提供している。2022 年度開始時点ではコロナ禍にあり、中長期留学を除いてはオンラインによる交流を主として行った。新型コロナウイルス感染症の影響への対応を含めて、これまでの取り組みを説明する。

2.1 新型コロナウイルス感染症の影響への対応について

新型コロナウイルス感染症拡大が本事業の実施に大きな影響を与えた。特に影響を受けた学生交換プログラムにおいては、各国の入国規制や移動制限により、2021 年度及び 2022 年度前半はオンライン以外の開催が不可能であった。このような状況下であっても体験重視型のオンラインプログラムを実施し、学生の異文化に対する理解を深め、コミュニケーション能力を涵養させることができた。

また、学生の安全確保などの観点から、中長期留学の実施においては各国の新型コロナウイルス感染症の最新状況を注視しながら派遣を行った。

また、本事業の運営会議も対面での開催が困難となり、定期的オンラインにて開催した。このようにコロナ禍であっても学生の交流環境整備に積極的に取り組んだ。

2.2. 各プログラムの取り組み内容

2.2.1 中長期留学

中長期派遣プログラムは、本事業の中でも重要な取組の一つであり、学生が数か月から1年の中長期海外留学を行う。中長期的に派遣先大学の教員の下で研究を行い、新たな知識やスキルを習得し、自分の専門分野について深く理解することができ、問題を多面的に分析する能力の涵養が期待できる。また、デュアルディグリープログラム参加学生は、派遣先大学の正規学生として学生生活を体験することができ、自身の学問領域だけでなく、留学先の学生との交流を通じて文化や社会についても深く学ぶことができ、異文化理解を深め、コミュニケーション能力を強化する重要な機会となった。さらに、この留学経験を通じて、自分の強みや弱み、価値観や興味を再評価し、自己成長するとともに、異なる文化や教育環境での経験によりグローバルな視点を養うことができた。

以上のように、本プログラムは学術的な研究、異文化理解、自己成長、グローバルな視点の獲得といった多様な経験を学生に提供した。このような経験が学生の人生における重要な節目となり、彼らの将来のキャリアや人生観を形成するための基盤となることを期待する。

2022年度の中長期留学の参加者数は次の通り：

- ・ University of Yamanashi (山梨大学) : 4名
- ・ Hangzhou Dianzi University (杭州電子科技大学) : 5名
- ・ Pukyong National University (釜慶大学校) : 2名
- ・ Universiti Malaysia Perlis (マレーシア・ペルリス大学) : 2名



釜慶大学校への留学



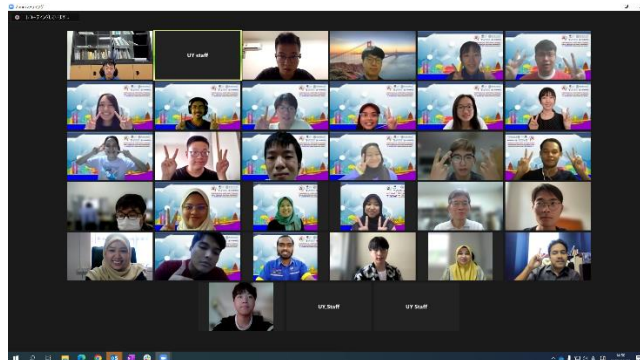
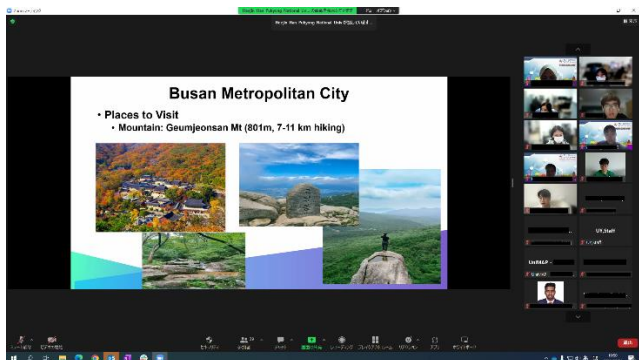
マレーシア・ペルリス大学への留学

2.2.2 短期学生交流 (ショートプログラム)

ショートプログラムでは、近年の学生の国際交流における心理的な壁を取り払うための第1歩として、学生が感じるハードルを下げ、海外へ踏み出す契機となるよう、各国の文化体験等で構成している。派遣先(本事業参加の各大学)の教員から直接授業が受けられ、現地の学生と交流することで新たな視点と知識を得ることができる絶好の機会であり、この体験を足掛かりに、海外や海外の大学に意識を向けるというマインドを養わせることとしていた。

2022年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、各国への渡航制限があったため、渡航してのプログラムを行うことが出来なかった。そのため、4大学合同で10日間のオンラインプログラムを開催した。

各大学が大学紹介、自国文化紹介、及び体験授業を2日ずつ行った。その他各国からの参加者が混在したグルーピングを行い、国際交流に関するディスカッションを行った。4か国併せて37名の学生が参加した。



また、2022年度春季には各国の渡航制限が緩和されたため、2023年3月に山梨大学にて実際に渡航してのショートプログラムを開催することが出来た。学年暦の関係で今回はマレーシアからのみの参加となったが、文化体験の他、AIのミニ講座やラボツアー、日本人学生との討論会を行い、AIに関する関心を深め、その後の本学へのデュアルディグリープログラムや中長期留学への参加意欲を高めることができた。

また、ショートプログラムではコミュニケーション能力を鍛えるだけでなく、異文化理解を深め、それに対応する能力を身につけることや、新たな環境で様々な視点から世界を見て、感じることで、改めて自己の興味や価値観、強みや弱みについて深く考える機会を与えることで、学生の自己成長の促進の機会とした。

以上のように、ショートプログラムは学術的な学びだけでなく、異文化理解、コミュニケーションスキル、自己成長といった様々な面で学生に価値ある体験を提供した。参加学生にとっては、世界をより広く深く理解するための重要な一歩となった。



討論会



風呂敷体験

2.2.3 インターンシップ

新型コロナウイルス感染症の影響により、受入企業を選定することが出来ず、残念ながら2021年・2022年度はインターンシップの実施ができなかった。新型コロナウイルス感染症の影響が少し落ち着いた2023年2月にウィンタースクールに参加した韓国の学生は山梨大学にて主催した企業見学会に参加した。日本の企業や職場について知る機会を提供し、今後の進路や研究の方向性を改めて考えるきっかけを与えることが出来た。

2.2.4 反転型オンラインコース

2022年12月に本学において、AIシステムデザインに関するオンライン集中講座を開催し、4大学から10名の学生が受講した。本講座は、各大学の学年暦の違いに影響がなく、学習効果を高めること、自国にいながら海外の大学から最先端のAI理論や応用技術を学ぶことができ、グループディスカッションを通じて理解を深めることを目的として実施した。

また、デザイン思考の第一人者である台湾のシナリオ・ラボ創設者兼R&DディレクターのDer-Jang Yu博士を講師に招き、「デザイン思考とシナリオ指向の共同デザイン」と題した特別講義を行った。授業では、「差別

化」の課題を見つけるフィールドワークが課され、各国の学生で構成されたチームごとに、授業で学んだアプローチを活用して、その課題を解決するためのAI技術を考案した。本講座は、デザイン思考の実践方法を学ぶ貴重な機会となった。

この科目の単位は、4大学において認定を受けることができる仕組みを構築した。

2.2.5 サマースクール (2023年冬季実施)

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、2022年夏にサマースクールの実施が実現できなかったが、2023年2月に入国制限が緩和されたためサマースクールに代わる「ウィンタースクール」を本学にて、実施した。ウィンタースクールには、各大学から23名の学生、教育補助員として本学の学生5名、そして各大学から計8名の教員が参加した。

このウィンタースクールは、①高度なAI技術に関する講義、②実問題解決プロジェクト、③Academic-Industryフォーラムの3つのパートから構成されており、①では、AI分野の山梨大学教員が、ディープラーニングを用いた信号処理、コンピュータビジョン、3Dモデルの表現と検索技術、およびそれらを農業、教育、医療分野に応用する方法についての講義を行った。②では、参加学生を各国混在の5つのチームに分け、学んだ知識を用いて、1週間程度の期間の中で、課題においてAIを用いた問題解決の考案をした。③では、基調講演者として、Mr. Shihong LAO氏 (CEO, SenseTime Japan Ltd.) が、「AI powering future」、Dr. Jonghoon Park氏 (CEO, Neuromeka Co., Ltd.) が「Anatomy of A Commercial Collaborative Robot from the Control Viewpoint」をテーマに、それぞれ講演を行った。その後、スクールにて編成した4カ国混在チームごとに、AIを活用した問題解決の成果について発表した。

参加学生にとって非常に有意義なプログラムとなり、AI技術とその応用に対する理解を深める機会となった。また、本学内に向けてもオンライン配信を行ったため、教職員にとってもAIの最新動向に触れるよい経験となった。



集合写真



実問題解決プロジェクト

A3I WINTER SCHOOL
A3I Academic-Industry Forum

Dr. Shihong LAO
CEO, SenseTime Japan Ltd.

Dr. Jonghoon Park
CEO, Neuromeka Co., Ltd.

February 10, 2023
13:00-17:30 (JST, KST) 12:00-16:30 (CST, MST)

Forum: 13:00-16:00 (JST, KST) 12:00-14:00 (CST, MST)
Students' presentation: 15:30-17:30 (JST, KST) 14:30-16:30 (CST, MST)

Join us online!
<https://yamanashi.ac.jp/zoom.us/j/89783691123?pwd=ZGIxV2ErNEFEdQeWNUQUFpVjYyZlRFTU09>

Meeting ID: 897 6369 1123
Pass code: 808104

フォーラムのチラシ

2.3 教職員の交流

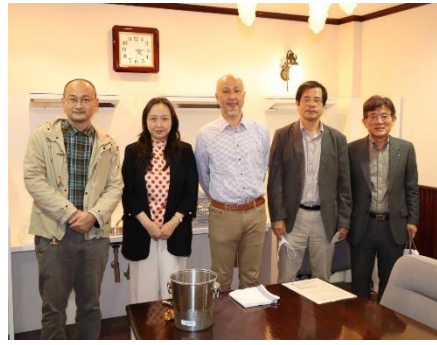
2.3.1 韓国・国立釜慶大学校 (PKNU) の教員が来学

2022年10月13日(木)、韓国・国立釜慶大学校(PKNU)のCHUNG Wan Young教授とCHUNG Yeon Ho教授が来学した。一行は、大村智記念学術館で大村智特別荣誉博士の功績や本学の歴史に触れた後、茅暁陽国際交流センター長の案内により、研究室やスマート農業プロジェクトルームを視察し、研究に関して活発な意見交換を行った。また、中山栄浩工学域長や工学域評議員らとの協議会では、釜慶大学校と本学の紹介をお互いにし、大学について理解を深めたほか、デュアルディグリープログラムに関する意見交換を行った。

その後、中村和彦理事を表敬訪問し、今後の教員・学生交流について意見を交わした後、ワイン科学研究センターの視察や、A3Iプログラムに関する打合せを実施し、プログラム推進のための更なる協力体制を強化する機会となった。



表敬訪問の様子



ワイン研究センター視察



大村智記念学術館を視察

2.3.2 山梨大学の教職員韓国訪問

2023年3月26日（日）-3月29日（水）、本学教職員が韓国の国立釜慶大学校（以下、PKNU）を訪問し、A3Iプログラムの関係教員らと意見交換会を行った。

意見交換会では、両大学間の学生交流や単位交換等について議論したほか、2023年秋に本学への留学を希望する学生に向けて、本学のAI研究の最新技術や研究室の紹介をした。

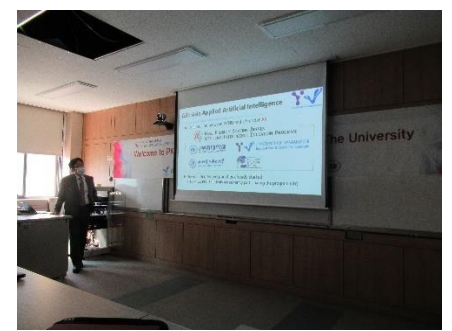
今回の訪問により本学とPKNUとの新たな共同研究や学生交流の可能性が広がり、本プログラムのさらなる促進に向け、協力体制を強化することができた。



PKNUキャンパスにて



研究交流会



A3Iプログラム紹介

2.4 交流プログラムの質の向上のための評価体制

2022年1月21日に、4大学の代表者によって「A3I運営委員会」を発足させた。運営委員会で各国の各大学教員がメンバーとして参画し、プログラムの運営方針から単位に関わる事などの実質的な内容の検討、決定を行っている。一方で、自己評価、点検を行うため、各国の学术界、産業界から選定された有識者で構成する外部評価委員会を発足させた。

2.4.1 A3I運営委員会の開催

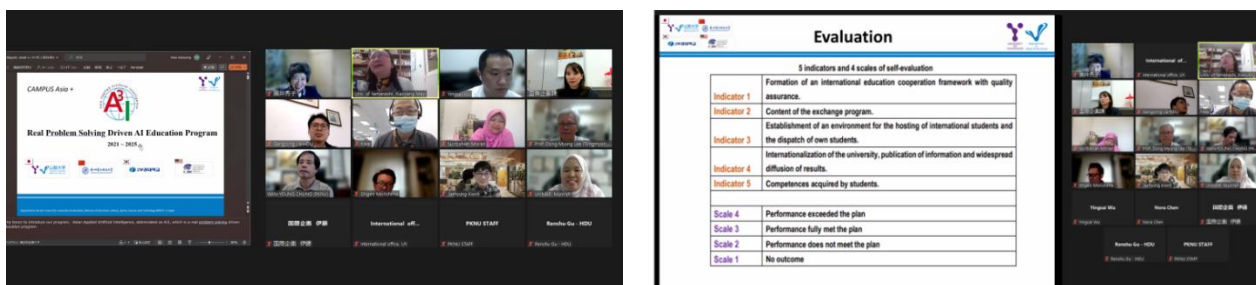
2022年5月27日（金）、第3回A3I運営委員会を開催し、長期プログラムの単位互換や必要手続きについて議論し今後の実施事項を確認した。また、サマースクール(A3Iキャンプ)の開催時期について4大学のスケジュールと照らし合わせながら検討を行った。8月に開催予定の短期プログラムに向けては、各校で取り組むことを再確認した。

2.4.2 外部評価委員会の開催

2023年3月23日（木）、A3Iプログラム外部評価委員会会議をオンラインで開催した。コンソーシアムを組む本学、杭州電子科技大学（中国）、釜慶大学校（韓国）、国立ペルリス大学（マレーシア）の関係者、各大学が招聘したAI分野の学識経験者およびAI業界の有識者8名の外部評価委員が参加した。

会議では、プログラムの実施責任者である本学コンピュータ理工学科の茅暁陽教授（本学理事、副学長）が

2022年度のプログラムの実施状況について報告した。また、各委員からは、プログラムについての評価およびアドバイスをいただき、この評価を基に、運営委員会にて報告書をまとめ、改めて運営委員会内で検証し、翌年度以降のプログラム運営に反映させている。



3. 今後の展望

2022年度前半までは、新型コロナウイルス感染症の影響によりオンラインを中心とした取り組みを行った。この、オンラインでの教育プログラムと国際交流の成功を踏まえ、オンライン授業の充実をさらに目指して、2022年度に山梨大学が行ったオンライン授業を、参考に各大学にてオンライン授業を順次開設していく予定である。また、博士学生向けにも4か国共有のオンライン科目を開設し、4か国の学生がより授業に参加しやすい環境を整えると共に、デュアルディグリープログラムによる学位取得の枠組みに沿った科目を提供することとする。

2022年度の冬季からは実際の対面形式での短期交流を開始しており、日本で開催されたウィンタースクールでは、学生同士が国籍の垣根を越えて共に1つのプロジェクトに取り組み、深く学ぶ機会となった。また、この実際の交流は、学生が新たな文化を体験し、異文化に対する理解を深める絶好の機会となった。これを基に2023年は中国、2024年は韓国、2025年はマレーシアにてスクールを開催し、各国各大学の強みと特色を活かしたプログラムを提供していくこととしている。

2023年から本格的に各国のショートプログラム開催が可能となったため、今後はさらに、学内におけるプログラムの広報を強化し、できるだけ多くの学生が交流に参加し、異文化と研究交流を通して、中長期留学のモチベーションを高め、デュアルディグリー取得者の増加につなげていく予定である。

中長期留学については、2022年度は中国への入国に制限があったため、派遣が叶わなかった。2023年度以降は派遣者数は増える見通しのため、引き続き、デュアルディグリープログラム、中長期留学について学生への説明会、HP等での情報発信を通して、参加の意義等を広く周知して、参加者を募っていく。受入学生について、人数が伸び悩んでいるため、各大学との入念な計画をもって、学生への周知と受け入れ研究室等の体制についての丁寧な説明と事前のマッチングを行っていく。また、中長期留學生については、2023年度以降、各大学の産業界との強みを活かして、産業界でのインターンシップを実現させていくため、すでに運営委員会で協議がなされており、各国計画を進めている。

これまでの達成された成果により、2023年度は、さらに本格的に各学生交流プログラム遂行を行っていく。今後も、学生たちにとって最高の学習体験を提供するために、一層の努力を続けていく。

III. 日本語教育・留学生サポート事業

留学生のための日本語教育および修学・生活上の指導・相談、外国人留学生向けイベントなどの外国人留学生支援にも力を注いでいます。

日本語教育

1. 日本語 Intensive コース

国際交流センター（国際交流センター（2023年1月より国際化推進センター））にて開講している日本語 Intensive コースについて、年次報告にて報告します。

2022年度 日本語 Intensive コースの報告

布村 猛・會田 篤敬

1. 日本語 Intensive コースの概要

国際交流センターで提供している日本語 Intensive コースには、「日本語 Intensive 入門 I」、「日本語 Intensive 入門 II」、「日本語 Intensive 初級」の3つの授業がある。いずれのコースも指導教員の許可を得た私費留学の研究生、英語コース所属の大学院生、そして交流協定大学からの交換留学生を受講生として受入れている。単位取得を必要とする交換留学生に関しては、必要要件を満たしコースを修了した者には単位認定を行っている。「日本語 Intensive 入門」コースは「大学院や教員研修などの勉学生活に入るために基礎的な日本語力の習得をめざす」ことを目標にしており、「日本語 intensive 初級」コースは「大学・日常生活を円滑に送るため、入門コースで学んだ知識を運用に結びつけ、読む・書く・聴く・話す、の四技能においてコミュニケーション力を中級レベルへ高めること」を目指している。いずれのコースも指導教員の許可を得た私費留学の研究生、そして交流協定大学からの交換留学生も受講生として受入れている。単位取得を必要とする交換留学生に関しては、必要要件を満たしコースを修了した者には単位認定を行っている。これらのコースは言語のみならず、文化、そして地域社会について学べる環境を提供しつつ、日本や山梨のよき理解者へと育成することを目指している。

2. 2022年度 前期 日本語 Intensive コース

新型コロナウイルス感染拡大以降、初めて、授業開始時点で履修学生の全員が入国していたため、すべての授業を対面で始めることができた。

2.1. 前期 日本語 Intensive 入門 I (週6コマ)

2022年度前期は、履修学生がいなかったため非開講となった。

2.2. 前期 日本語 Intensive 入門 II (週6コマ)

受講生は、南アジアからの留学生1名だった。この学生は、修士課程の大学院生だった。授業は、週1回（各回は3コマ）の頻度で行われた。3コマのうち、2コマは新出文法や単語に焦点を当てた授業であった。残りの2コマのうち、1コマは漢字の授業、もう一方はプレゼンテーションの授業だった。先述の通り、授業はオンラインで行われたが、最後の回のプレゼンテーション発表のみ、対面で行った。プレゼンテーションのトピックは、自身が博士課程で行なう研究内容であった。科学的な内容を含んでおり、非常に複雑な内容であったが、図やグラフなどを使用し、工夫しながらプレゼンテーションのスライドを作っていた。使用した教材は以下のとおりである。

主教材：『改訂版 聞く・考える・話す留学生のための初級日本語会話』

：『みんなの日本語初級Ⅱ 本冊』

副教材：『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版 書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版 標準問題集』

(いずれもスリーエーネットワーク)

受講生が1名のみだったが、最初から最後まで精力的に学習に取り組んでいた。授業内の会話では、自国の文化や自身の家族についての話題が多かった。本授業を受講した留学生は、日本の企業に就職することができた。

2.3. 前期 日本語 Intensive 初級 (週5コマ)

受講生は、ヨーロッパからの交換留学生2名と東南アジアからの留学生1名、東アジアからの留学生2名計5名だった。授業は、週3回6コマの頻度で行われた。6コマのうち、3コマは新出文法や会話表現に焦点を当てた授業であった。残りの2コマのうち、1コマは読解の授業、もう一方はプレゼンテーションの授業だった。本授業の最大の特徴として、留学生が自身の研究や専門を紹介するプレゼンテーションを日本語で行う点にある。これは、自身の専門分野で一般的に使用される専門語彙を、一般的な日本語教育過程よりも、早い段階で学び、使用可能とすることを目的としたものである。これにより、研究室でのコミュニケーションや、就職活動を日本でする際のコミュニケーションの活発化が期待される。

使用した教材は以下のとおりである。

主教材：『Weekly J:日本語で話す6週間』(凡人社)

：『改訂版 日本語中級 J301 -中級前期-』(スリーエーネットワーク)

プレゼンテーションでは、「ホラー漫画『富江』に見られる恐怖表現に関する考察」「日常的な食事の取り方と栄養摂取の関係」といった内容の発表があり、自身の大学で学んでいる専門を日本語で発表しようとしている様子が伺えた。

3. 2022年度 後期 日本語 Intensive コース

2022年度後期のも前期同様コースについても、コースが開始する9月以降も留学生の入国の目処が立たず、全てのコースをオンラインで開講することを余儀なくされた。

3.1. 後期 日本語 Intensive 入門Ⅰ (週6コマ)

受講生は、ドイツからの交換留学生2名と東アジアからの留学生3名の計5名だった。授業は、週2回(各回は3コマ)の頻度で行われた。6コマのうち、4コマは新出文法や単語に焦点を当てた授業であった。残りの2コマのうち、1コマは漢字の授業、もう一方は作文や会話表現などの授業だった。

使用した教材は以下のとおりである。

主教材：『改訂版 聞く・考える・話す留学生のための初級日本語会話』

『みんなの日本語初級Ⅰ 本冊』

副教材：『みんなの日本語初級Ⅰ 第2版 書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語初級Ⅰ 第2版 標準問題集』

(いずれもスリーエーネットワーク)

授業時間の中では、新規語彙・文法項目の使い方を学び口頭練習を行うのみで、応用問題は次回までの課題としたが、受講生の熱心な予習・復習と作文課題などへの取り組みにより、1課を1コマずつ、導入と練習の後にはできる限り受講生同士の対話ができるような時間を取り、場面にあった発話ができるよう促した。6、7課ごと

のテストは言語知識を問うものだけではなく、場面設定のある会話で運用力をみるタスクを与え、評価を行った。

3.2. 後期 日本語 Intensive 入門 II (週 6 コマ)

授業の受講生は、中国とドイツからの交換留学生各 1 名の合計 2 名であった。前期と同様に、この授業は、週 2 回 (各回は 3 コマ) の頻度で行われた。授業内容も変更はなく、6 コマのうち、4 コマは新出文法や単語に焦点を当てた授業であった。残りの 2 コマのうち、1 コマは漢字の授業、もう一方はプレゼンテーションの授業だった。最後の回にプレゼンテーション発表があったが、受講生が来日できていなかったため、こちらもオンラインで行った。プレゼンテーションのトピックは、自身の研究内容であった。このプレゼンテーションでは、単に研究内容を紹介するだけにとどまらず、自国の大学での研究環境、自身の研究がどのように役立つのか、自身の研究をもとに将来やりたいこと等に関してもしっかりと説明しており、真摯に取り組む姿勢が見られた。使用した教材は以下のとおりである。

主教材：『改訂版 聞く・考える・話す留学生のための初級日本語会話』

：『みんなの日本語初級Ⅱ 本冊』

副教材：『みんなの日本語初級Ⅱ 第 2 版 書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語初級Ⅱ 第 2 版 標準問題集』

(いずれもスリーエーネットワーク)

先述の通り、この授業は週 2 回 (各回は 3 コマ) の頻度で行われた。日本語 SA による会話活動 (30 分) もこの授業で行われた。そこでは、知っている単語で何とか伝えようと頑張る、言いたい単語や言い回しを質問するなど、精力的に参加していた。また、この授業の最終回では、担当教員に向けた手紙を読むなど、コミュニケーションに対する意欲の高さが窺えた。

3.3. 後期 日本語 Intensive 初級 (週 5 コマ)

受講生は、東南アジアからの留学生 1 名、東アジアからの留学生 6 名の計 7 名だった。授業は、週 3 回 6 コマの頻度で行われた。6 コマのうち、3 コマは新出文法や会話表現に焦点を当てた授業であった。残りの 2 コマのうち、1 コマは読解の授業、もう一方はプレゼンテーションの授業だった。本授業の最大の特徴として、留学生が自身の研究や専門を紹介するプレゼンテーションを日本語で行う点にある。これは、自身の専門分野で一般的に使用される専門語彙を、一般的な日本語教育過程よりも、早い段階で学び、使用可能とすることを目的としたものである。これにより、研究室でのコミュニケーションや、就職活動を日本でする際のコミュニケーションの活発化が期待される。

使用した教材は以下のとおりである。

主教材：『Weekly J: 日本語で話す 6 週間』(凡人社)

：『改訂版 日本語中級 J301 -中級前期-』(スリーエーネットワーク)

プレゼンテーションでは、「低解像度画像による生体認証のための画像再構成アルゴリズム」「マルチモーダルに基づくニューラルネットワーク害虫検査システム」といった自身の修士論文あるいは博士論文のトピックを紹介するような発表が多く見られた。

4. 長期休暇中の日本語 Intensive コース

第三期中期計画に従って、アジアをはじめとする諸外国から優秀な留学生の受入れ拡大に取り組んできた。そ

れに合わせて、英語対応コースの漸増も含め、カリキュラムのグローバル化も進めてきた。このような環境整備のなか、留学生のうち実に63%は大学院生であり、日夜各自の研究に専念できている。しかしながらその7割以上は、ビジネス日本語はもとより、修了時においても日本語は、ほぼ0レベルのままに等しいという課題がある。この課題を解決するために、英語対応コースに入学予定の大学院生については、入学時にN4レベルに到達できるように、渡日前に半年間日本文化・日本事情を題材としながら300時間の日本語強化コースとして、「intensive online コース」を提供している。このコースは、8月から10月と1月から3月までの3ヶ月を使用して、週6日、90分×12コマの授業を提供するものである。これらのコースはすべて、日本語能力検定に合格するための基本的な文法項目の理解と、ビジネス場面において求められるコミュニケーション能力の向上を目標として開講されている。使用教材、及び指導内容は上記「intensive 入門コースⅠ」と「intensive 入門コースⅡ」を合わせた内容である。

5. まとめ

2022年度は、パンデミック以降初めてすべての授業を対面で実施することが可能な条件が整った年度であった。しかしながら、オンライン授業で全コースを運営していた際に得られた経験を活用し、各授業実施する小テストのフィードバックのオンライン上での提供や、文法説明動画を事前に視聴し、教室ではコミュニケーションを中心に練習する反転授業を実施するなど、選択的にオンライン授業時に得られた利点を対面授業のコースの中に位置づけることができた。

2. 日本語補講

日本語補講は、国際交流センター（2023年1月より国際化推進センター）が提供する授業科目以外の日本語教室です。主として大学院生や研究生を対象とし、研究者またはその家族にも開かれたプログラムとなっています。実施状況について国際交流センター江崎哲也准教授の年次報告にて報告します。

日本語補講

江崎 哲也

1. 留学生を取り巻く状況と、本学の日本語教育

国際交流センター（2023年1月より国際化推進センター）では、2022年度は表1に示すように、(1)学部留学生向け日本語科目を年間15コマ、(2) Intensive 日本語コースを年間34コマ、(3)夏季/春季休暇 Intensive 日本語コースを年間28コマ、(4)日中研究が忙しくてそれらの授業に出られない大学院生や研究生のためにV時限（16時30分～）以降に日本語補講を年間12コマ開講した。このように数多くの日本語の授業・補講を提供してきたのは、留学生が入学後できるだけ短期間のうちに日本語を習得し、専門の勉強や研究を支障なくできるようにするためであり、レベル別のクラスできめ細かく丁寧に指導する必要があるからである。また、本学の第4期中期目標・中期計画において設定されている留学生受け入れ数値目標を達成し、さらに、ポスト留学生30万人計画を見据えて、大学内で留学生の日本語能力を高め、日本国内の企業に就職させていくことが必要とされているためである。

表1 国際交流センター開講科目一覧(日本語科目・日本語補講のみ)

開講科目	コマ数/年度	受講開始時のおおよその日本語レベル * JLPT: 日本語能力試験	出席が必要な コマ数
(1) 学部留学生向け日本語科目	15(4レベル)	JLPT N2 以上 (日本語学習歴 600 時間以上)	1~2 コマ/週
(2) Intensive 日本語コース	34(3レベル)	入門期から JLPT N4	5~6 コマ/週
(3) 夏季 / 春季 休暇 Intensive 日本語コース	28(1レベル)	入門期	14 コマ/週
(4) 日本語補講	12(6レベル) ただし授業回は 12 回	入門期から JLPT N5(両キャンパス) JLPT N3(主に甲府キャンパスの学生) JLPT N2(主に医学部キャンパスの学生)	1~2 コマ/週

2. 日本語補講の完全オンライン化に伴うスリム化

2020年度は当時の留学生施策を鑑み、それ以前に比し2コマ増の計16コマ相当の時間を日本語補講としてオンラインで開講してきた(表2参照)。しかしながら、オンラインであっても十分学習効果が得られることが確認できたため、2021年度以降は表3に示す通り、基本的には所属キャンパスの区別をなくし、6レベル6クラスを開講し、それぞれ前期・後期ごとに週1回12週にわたって展開された。なお、この「日本語補講」は、単位認定の対象にはならず、席が用意できる限りは、留学生の家族、研究者・研究員にも受講を認めている。

表2「日本語補講」一覧 2020 年度

キャンパス	クラス名	開講学期	対象レベル (日本語学習 歴)	クラスにおける 総学習時間
甲府	K-A(入門 1)	前期・後期	0-25 時間	18 時間(90 分×12 回)
	K-B(入門 2)	前期・後期	15-50 時間	18 時間(90 分×12 回)
	K-C(初級 1)	前期・後期	35-100 時間	18 時間(90 分×12 回)
	K-D(初級 2)	前期・後期	50-100 時間	18 時間(90 分×12 回)
	K-E(論文作成・口頭発表)	前期・後期	450 時間以上	18 時間(90 分×12 回)
医学部	M-A(入門)	前期・後期	0-25 時間	12 時間(60 分×12 回)
	M-B(初級)	前期・後期	15-50 時間	12 時間(60 分×12 回)
	M-C(初中級)	前期・後期	35-100 時間	12 時間(60 分×12 回)
	M-E(論文指導・医療の日本語)	前期・後期	600 時間以上	18 時間(90 分×12 回)

表3「日本語補講」一覧 2021 年度以降

キャンパス	クラス名	開講学期	対象レベル (日本語学習 歴)	クラスにおける 総学習時間
甲府 / 医学部	K-A(入門 1)	前期・後期	0-25 時間	18 時間(90 分×12 回)
	K-B(入門 2)	前期・後期	15-50 時間	18 時間(90 分×12 回)
	K-C(初級 1)	前期・後期	35-100 時間	18 時間(90 分×12 回)
	K-D(初級 2)	前期・後期	50-100 時間	18 時間(90 分×12 回)
	K-E(論文作成・口頭発表)	前期・後期	450 時間以上	18 時間(90 分×12 回)
	M-E(論文指導・医療の日本語)	前期・後期	600 時間以上	18 時間(90 分×12 回)

3. 2022 年度前期

2022 年度前期の開講クラス、及び受講者は以下の表の通りである。

表4 2022 年度前期各クラスの申し込み者数と使用テキスト

クラス名	申し込み者数	使用テキスト/内容
入門1	17	『まるごと 日本のことばと文化入門 A1 かつどう』 第1課～第9課
入門2	10	『まるごと 日本のことばと文化入門 A1 かつどう』 第10課～第18課
初級1	13	『まるごと 日本のことばと文化 初級1 A2 かつどう』 第1課～第9課
初級2	7	『まるごと 日本のことばと文化 初級1 A2 かつどう』 第10課～第18課
論文作成・ 口頭発表	5	レポート・論文の作成に必要な表現の学習、口頭発表の練習
論文指導・ 医療の日本語	1	レポート・論文の作成に必要な表現の学習、口頭発表の練習、医療関連の日本語指導

4. 2022 年度後期

2022 年度後期の開講クラス、及び受講者は以下の表の通りである。

表5 2022 年度後期各クラスの申し込み者数と使用テキスト

クラス名	申し込み者数	使用テキスト/内容
入門1	16 ¹	『まるごと 日本のことばと文化入門 A1 かつどう』 第1課～第9課
入門2	18	『まるごと 日本のことばと文化入門 A1 かつどう』 第10課～第18課
初級1	7	『まるごと 日本のことばと文化 初級1 A2 かつどう』 第1課～第9課
初級2	8	『まるごと 日本のことばと文化 初級1 A2 かつどう』 第10課～第18課
論文作成・ 口頭発表	4	レポート・論文の作成に必要な表現の学習、口頭発表の練習
論文指導・ 医療の日本語	1	レポート・論文の作成に必要な表現の学習、口頭発表の練習、医療関連の日本語指導

5. 入門クラス等における使用教材の変更

6. 申し込み者数の変化と申し込み方法の変更

表6に2014年度から2022年度の日本語補講の申し込み者数の推移を示す。2014年度までは甲府キャンパスで3クラス、医学部キャンパスで5クラスの日本語補講を開講していたが、医学部キャンパスの1クラス当たりの平均申し込み者数が甲府キャンパスを下回ったため、2015年度から両キャンパスとも4クラスとした。また、2015年度後期からは各キャンパスの受講者のニーズにより適合したテキストに変更し、入門期から初級までの連続性があるクラスを開講した。さらに、2019年度後期に大学院の留学生が急増したことを受け、申し込み方法をweb申し込みに変更した。これらによって、2019年度後期には日本語補講の申し込み者数が89人に上った。前述のように2020年度は甲府キャンパスのコマ数が2つ増加したため、申込者の増加が見込まれたが、新型コロナウイルス感染症の影響が拡大したために、進学をあきらめざるを得ない学生もいたことから、後期は減少に転じた。2021年度についてはさらに受講者数が減少したが2022年度は申込者数が増加に転じた。これは前述の「夏季/春季休暇 Intensive 日本語コース」が非常に充実したものであり²、本学進学前の受講生にも広く開放したため一時的に申込者数が減ったものの、2022年度以降は新型コロナウイルス感染症の影響が多少弱まり、留学生数が増加したためだと思われる。

¹ ウクライナに対する人道的支援の一環として、ХНПУ імені Г.С. Сковороди(ハルキウ国立教育大学, H.S. Skovoroda Kharkiv National Pedagogical University)の学生にも2022年度後期の日本語補講を開放した。K-Aクラスに1件申し込みがあったが、本学で開講している他の科目との兼ね合いで、受講には至らなかった。

² この「夏季/春季休暇 Intensive 日本語コース」は修了時に JLPT N4 程度まで日本語力を伸ばすものであるため、日本語補講 K-A～K-D レベルを遥かに超える力が身につく。そのため、受講者数が大幅に減ったと考えられる。

表6 日本語補講の申し込み者数)の推移

	2014 年度		2015 年度		2016 年度		2017 年度		2018 年度		2019 年度		2020 年度		2021 年度		2022 年度	
	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	前 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期
甲府 キャン パス	18	12	13	17	17	32	15	15	15	40	28	81	52	46	45	28	53	54
医学 部 キャン パス	11	16	13	14	14	14	6	6	6	9	18	9	12	12				
合計	29	28	26	31	31	46	37	57	21	49	46	89	64	58	45	28	53	54

甲府3クラス→ | →甲府4クラス

医学部5クラス→ | →医学部4クラス

共通テキスト→ | →異なるテキスト

| →Web申し込み

| →統合

7. まとめと今後の課題

2015年度から2021年度にかけて日本語補講に対して5つの非常に大きな変更（①受講希望者のニーズに合わせた両キャンパスのクラス数の変更、②使用テキストの変更、③各クラスのレベルに連続性を持たせたこと、④申し込みを紙ベースからwebに変更）⑤オンライン化とスリム化を行ってきた。これらの改革と大学院留学生数の増加が相まって補講の申込者数は増加の一途をたどり、2021年度に一時的に減少したものの、2022年度に再び増加した。また、参加した受講生に対してG-フィロス（本学のグローバル共創学習室）の「日本語サポート」を利用した実践的な練習を宿題として課すことによって、日本語力できる限り伸ばすよう努めてきた。

日本語補講の受講者の多くは、英語で研究する学生であるが、生活に必要な日本語の習得や大学院の授業を日本語で受講することを切望しており、一部は日本での就職も希望している。今後とも一層の日本語補講の充実を図り、大学院生や研究生などの日本語力の向上を目指して、彼らの日本での研究生活をより充実したものにしていくことが求められる。

3. 日本語・日本事情教育

国際交流センター（2023年1月より国際化推進センター）では、主に学部留学生を対象として、日本語・日本語関連科目も開講しています。国際交流センター江崎哲也准教授の年次報告にて報告します。

日本語・日本語関連科目

江崎 哲也

主に学部留学生を対象として開講されている、国際交流センター（2023年1月より国際化推進センター）が提供する全学共通教育科目の日本語・日本語関連科目について2022年度の報告を行う。

1. 開講科目

2022年度開講の日本語・日本語関連科目は以下の通りである。科目名のⅠは前期、Ⅱは後期開講であることを指す。★は2022年度新規開講科目を示す。

前期（計12科目）

日本語初中級ⅠA、日本語初中級ⅠB、日本語中級ⅠA、日本語中級ⅠB、
日本語中上級Ⅰ、日本語上級Ⅰ、日本語演習A、★ビジネス日本語
日本事情Ⅰ、Language & Communication across Cultures、グローバルヘルス入門、Health System and Well-being in the World

後期（計9科目）

日本語初中級ⅡA、日本語初中級ⅡB、日本語中級ⅡA、日本語中級ⅡB、
日本語中上級Ⅱ、日本語上級Ⅱ、★日本語LR
日本事情Ⅱ、How to Effectively Study a Foreign Language

クラス分けは、前期・後期の履修申告の直前に行われたプレイスメントテストの結果に基づいて行った。レベルは初中級、中級、中上級、上級の4レベルとし、演習³は中級以上の学生を対象とした（図1）。

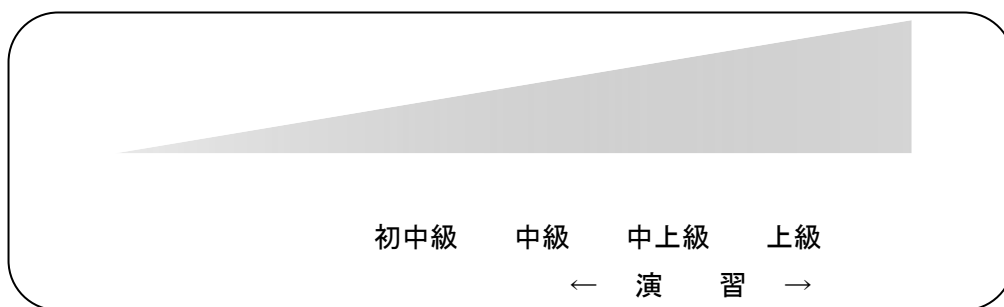


図1 日本語のレベル

各科目の受講生の学年、身分の内訳は、表1の通りである。なお、表中のNNSとは留学生、及び日本語を母語としない（あるいは日本語を第一言語としない）学生を指し、NSとは日本語を母語とする（あるいは日本語を第一言語とする）学生を指す。

³ 「日本語演習」は口頭発表能力を向上させることを目的とした科目であるが、発表のテーマについては特に与えられず、テーマ選びから受講生自ら行わなければならないため、「中級以上、かつ学部2年生以上」という制限を設けている。しかしながら、他の授業との兼ね合いで、前期に受けられる日本語科目がない場合に限り、1年生の受講も認めている。

表1 2022年度 日本語・日本語関連科目の受講生⁴

	期	担当		総数	立大学の学生	1年	2年	3年	4年	交換生・日研究生	院生	研究生・教員研修生等	授業受講生	国立教育大学	を提出するよう促した課題の数
初中級ⅠA	前	仲本	NNS	11		3	2				5	1	-	-	3
初中級ⅡA	後	會田	NNS	10						9	1		-	-	4
初中級ⅠB	前	江崎	NNS	4	1						3		-	-	12
初中級ⅡB	後	江崎	NNS	6						5	1		-	-	5
中級ⅠA	前	江崎	NNS	9	1	4	2				1	1	-	-	6
中級ⅡA	後	井上	NNS	19	2	2	3	2		10			-	-	10
中級ⅠB	前	伊藤	NNS	3		1						2	-	-	3
中級ⅡB	後	伊藤	NNS	11	1	1		2		6	1		-	-	9
中上級Ⅰ	前	會田	NNS	7		1				4	2		-	-	11
中上級Ⅱ	後	仲本	NNS	12	3	3				4		2	-	-	3
上級Ⅰ	前	江崎	NNS	5		3				1	1		-	-	4
上級Ⅱ	後	江崎	NNS	6	2			2		2			-	-	6
演習A	前	江崎	NNS	17		4	1	2	3	4	1	2	-	-	6
ビジネス日本語	前	伊藤	NNS	32			3	6	5	5	12	1	-	-	0
日本語LR	後	布村	NNS	21	3		5	2		10	1		-	-	0
日本事情Ⅰ	前	伊藤	NNS	12		2	1	1		2	6			-	12
			NS	25		20	3	1	1					-	
日本事情Ⅱ	後	伊藤	NNS	17		1			2	12	2			-	12
			NS	22		19	1	2						-	
Language & Communication across Cultures	前	奥村	NNS	16		6	1			4				5	2
			NS	4		4									-
グローバルヘルス入門	前	宮本	NNS	2						1		1		-	0
			NS	25		18	7								-
Health System and Well-being in the World	前	宮本	NNS	2			1	1						-	0
			NS	5		5									-
How to Effectively Study a Foreign Language	後	會田	NNS	27	1	3	1			22				-	7
			NS	12	4	7			1						-

表2に日本語・日本語関連科目の受講生数の推移を示す。日本語科目（初中級、中級、中上級、上級、演習）の受講生数（延べ人数）は、2014年度から2019年度まで増減を繰り返していたものの、2020年度、2021年度は大幅に減少した。しかし、2022年度は新規開講科目「ビジネス日本語」、「日本語LR」を開講したため、大幅に増加した。近年、GPAを強く意識しているためか、卒業要件に必要な日本語科目の履修が終わったと思われる学部3・4年生の受講生が少ない傾向が続いていたが、それが一旦止まったようである。一方、研究生、大学院生については、日本での就職を意識する学生が少しでも日本語力を高めるべく、積極的に日本語の授業に参加する姿が見られた。

日本語関連科目（日本事情、Language & Communication across Cultures、グローバルヘルス入門、Health System and Well-being in the World、How to Effectively Study a Foreign Language）は、2014年度から2019年度まで増減を繰り返していたものの、2020年度は減少傾向に転じていた。しかし、2021年度は190人、2022年度は169人となり、特に日本語を母語とする学生の受講者数が伸びた。これらの科目は授業の性質上、受講生数の上限を定めているが、今後とも共修授業に興味を持たせるよう、働きかけていきたい。

なお、表1の右から2番目の列は、ウクライナに対する人道的支援の一環として、ХНПУ імені Г.С. Сковороди（ハルキウ国立教育大学、H.S. Skovoroda Kharkiv National Pedagogical University）の学

⁴ ここでいう受講生は、単位取得希望学生（学部生・交換留学生）以外の、大学院生や研究生なども含めている。

生に Language & Communication across Cultures を開放したところ、5名の受講者があったことを表している。また、表1の右端の数字は、各科目において本学のG-フィロス（グローバル共創学習室）の日本語学習サポートサービス、または英語学習サポートサービスを受けた上で課題を提出するよう促した回数である。どの科目もできる限りSA（Student Assistant）とのコミュニケーションを取らせるよう工夫することで、学習意欲の向上等につなげている。

表2 日本語・日本語関連科目の受講生数の推移

	2014年度		2015年度		2016年度		2017年度		2018年度		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
日本語科目(NNS)	74	39	57	41	62	60	72	56	57	48	72	56	73	59	65	33	88	85
日本語関連科目(NNS)	19	24	19	24	19	23	21	29	58	21	28	33	28	22	34	24	32	44
日本語関連科目(NS)	65	55	33	48	35	49	42	49	51	53	41	40	44	39	102	30	59	34
合計	158	118	109	113	111	132	135	134	166	122	141	129	145	120	201	87	17	16

2. 2022年度の開講記録

各科目は、以下のような目的・内容で教室活動が行われた（表3参照）。

表3 日本語・日本語関連科目の概要

授業タイトル (主な内容)	担当	主な使用テキスト、参考書	内容				
			読む	書く	聞く	話す	文法
初中級ⅠA (会話と文法)	仲本	『J.Bridge to Intermediate Japanese』(凡人社)	△	△	◎	◎	○
初中級ⅡA (文法の復習と会話)	會田	『J.Bridge to Intermediate Japanese』(凡人社)	△	○	◎	◎	○
初中級ⅠB (作文)	江崎	『大学・大学院 留学生の日本語② 作文編』(アルク)	△	◎	△	△	○
初中級ⅡB (少し専門的な文章の読み方)	江崎	『改訂版大学・大学院 留学生の日本語 ①読解編』(アルク)	◎	△	△	△	○
中級ⅠA (読解)	江崎	『改訂版大学・大学院 留学生の日本語 ③論文読解編』(アルク)	◎	△	△	△	○
中級ⅡA (読解、意見のまと	井上	『中・上級日本語教科書 日本への招待 テキスト』(東京大学出版会；	◎	○	△	○	○

め方)		第2版)						
中級IB (場面や相手に沿った適切な話し方)	伊藤	『日本語上級話者への道—きちんと伝える技術と表現』(スリーエーネットワーク)	△	○	◎	◎	○	
中級IIB (作文)	伊藤	『小論文への12のステップ—中級日本語学習者対象』(スリーエーネットワーク)	△	◎	△	△	○	
中上級I (会話・聴解・発表)	會田	『中上級学習者のための日本語会話』(スリーエーネットワーク)	△	△	◎	◎	△	
中上級II (論理的な文章の書き方)	仲本	・『大学・大学院 留学生の日本語④論文作成編』(アルク)	○	◎	△	△	○	
上級I (レポート・論文の書き方)	江崎	『論文ワークブック』(くろしお出版)	△	◎	△	△	○	
上級II (発表のし方と、新聞記事などの資料の読み方)	江崎	『トピックによる日本語総合演習上級』、『トピックによる日本語総合演習 上級用資料集』(スリーエーネットワーク)	○	○	◎	◎	△	
演習A (発表のし方)	江崎	『大学生のための日本語—効果的学習のために』(産業能率大学出版部)	△	△	○	◎	△	
ビジネス日本語 (ビジネス場面の会話、メールなど)	伊藤	『ビジネス日本語 : オフィスで使える! マナーも身につく! テキスト1 改訂版』(日建学院)	○	○	◎	◎	△	
日本語LR (JLPT N1レベルへの到達を目指した読解演習)	布村	『新完全マスター読解日本語能力試験N1』(スリーエーネットワーク)	◎	△	△	△	○	
日本事情I	伊藤	『日本の風俗起源がよくわかる本』(大和書房)	日本人の学生と一緒に、日本の文化や日本事情を勉強する授業。文化や社会について学びながら、日本語力を伸ばす。テーマに基づくグループ・ディスカッションを行い、各国・地域や家庭の習慣、文化について紹介しあう。 (IとIIは別内容)					
日本事情II	伊藤	『日本の風俗起源がよくわかる本』(大和書房)						
Language & Communication across Cultures	奥村	-(授業内指示、自主作成教材)	This class aims to equip students to understand the role of language and communication across cultures highlighting the importance of					

			intercultural communication and language. In the class consisting of both international and Japanese students, all the interactive activities are conducted in English.
グローバルヘルス 入門	宮本	-(授業内指示、自主作成教材)	「グローバルヘルス」とは世界に広がる「容認できない健康格差」を是正するための様々な取り組みを指し、「健康」という視点で日本語を母語とする学生と一緒に世界の課題を考える。
Health System and Well-being in the World	宮本	-(授業内指示、自主作成教材)	Purpose of the lecture: 1) Students will be interested in the health systems in the world; 2) Students will be interested in the social well-being in the world; 3) Students will think about diversity of system and how to reduce health disparities.
How to Effectively Study a Foreign Language	會田	-(授業内指示、自主作成教材)	Students will learn basic knowledge about effective foreign language learning methods. Students will also get the chance to think about three topics from different points of view. These are the topics: 1. Effectiveness in learning foreign languages, 2. Factors related to learning foreign languages, and 3. How to control foreign language learning factors.

*「内容」の項目の記号は、◎：よく勉強する(よく取り上げる/扱う)、○：勉強する(取り上げる/扱う)
△：あまり勉強しない(あまり取り上げない/扱わない)ということを表す。

3. まとめと今後の課題

2022年度の日本語科目の日本語非母語話者の総受講生数は173人であり、前年度に比べて大幅に増加した。これは日本での就職を意識した科目を増やしたためであると考えられる。また、日本語関連科目（日本事情、Language & Communication across Cultures、グローバルヘルス入門、Health System and Well-being in the World、How to Effectively Study a Foreign Language）は、2021年度ほどではないものの、日本語非母語話者、日本語母語話者ともに多くの学生が受講した。入学当初から異なる文化やグローバルな問題に興味を持てるよう、これらの科目の履修の重要性を母語話者、非母語話者双方に訴えつづけていきたい。今後も共修型授業を通して、学生の異文化理解力を高めていき、学内の国際化にもつなげていきたい。

日本語科目における「G-フィロス」の利用を2022年度も強く推奨し、課題の一部をG-フィロスで行うような仕組みにした。これにより、日本語の学習時間が十分確保され、SA（Student Assistants）と日本語を母語としない学生との交流も促進されたとと思われる。

留学生サポート

1. 留学生支援・相談、文化交流

国際交流センター（2023年1月より国際化推進センター）では、留学生の生活・就学に関する相談・指導を行うだけでなく、文化体験・交流や講演会等、留学生にとって有益な行事等を提供することによって、留学生が日本での生活に馴染み、学業に取り組める環境を整えるための支援も行っています。これら留学生支援・相談、文化交流について、国際交流センター伊藤孝恵准教授の年次報告にて、報告します。

留学生支援・相談、文化交流について

伊藤 孝恵

I. 指導・相談

山梨大学における留学生のための相談体制として、国際交流センターに留学生相談室が設置されているほか、国際交流センターの各教員がそれぞれオフィス・アワーを設けている。国際交流センターでは、留学生のみならず、海外留学や国際交流、G-フィロスに関心のある学生や、日本語教育に関する相談で訪れる学生にも対応している。

本稿では、そのうち、2022年度に留学生相談室で対応した主だった指導・相談、及び国際交流センターや国際部の一部支援行事や交流行事について報告する。

1. 生活、修学、進路・就職相談

体調不良が続き、授業を欠席しがちの学生には、年度をまたいで継続して支援してきた。履修している日本語科目の教員から出席状況や授業態度が気になるとの報告を受け、様子をみた方がよいと思われる場合は、留学生相談室から当該学生を呼び出し、話を聞くこともある。

学部一年次の留学生の交流パートナーである日本人学生から、授業への欠席が続いているとの連絡を受け、学生の所属学域の教職員、カウンセリング・サポート室と連携し、学生の親御さんと一緒に対応してきたケースもある。SNS メッセージやメール、電話等でも連絡が取れず、安否確認のため、何度もアパートを訪ね、親御さんにも来日してもらい本人の無事が確認できた。研究や対人関係の悩みから情緒不安定に陥りやすい大学院生には、指導教員と学生の状態を共有しながら、カウンセリング・サポート室とともに、学生の心理面や就職活動面を支えた。コロナ感染後に心身の不調が続いている学生には、辛い状態を一人で抱え込まないように、何度か部屋を訪問し様子を見守った。

2、3月から春先にかけての時期は、就職活動を行う学生からの就職相談、進路相談が寄せられる時期である。「専門知識・技術を生かしたいがどの企業を受けたらいいかわからない」「内定をいただいた会社があるが、本命の会社を受けてもいいか」「日本で就職か、帰国するか迷っている」など、学生一人一人の困りごとに丁寧に向き合って一緒に考えた。

2. 学部新入生個別面談

毎年5月の大型連休明けから、学部新入留学生を対象に30分～1時間程度の個人面談を実施している。前年度はオンラインでの実施だったが、2022年度は、留学生に留学生相談室に来てもらい、対面で入学後の生活の様子や気持ちなどを聞くことができた。

毎年この時期に行っている個別面談では、留学生相談室があることを新入生に知ってもらい、今後利用しやすいよう、相談担当教員との顔合わせの意図がある。また、入学当初の不安な気持ちや知りたいこと、困っている

ことは個人によって異なるため、誰に尋ねたらいいかわからないことも、個別に話す機会を設けることで、問題や不安を解消したり適切な窓口を紹介したりすることが可能となっている。

2022年度は、一部の対面授業やサークル活動の再開によって、日本人学生との交流があると話す新入生も複数あった。授業の前後に話したり、授業後に学生食堂で一緒にお昼をとったり、サークルで様々な学年・学科の日本人と交流できるという話が聞かれた。また、特に周囲に知り合いや親しい人ができていない新入留学生にとって、同国出身の先輩や同級生の存在感は大きく、生活情報を教えてもらったり一緒に授業を受けたりと、新しい環境に慣れる上で大きな支えとなっているようである。その一方、クラスに同国出身者がいない、学科に同国の先輩がいない新入生からは、「これから心配だ」と不安の声も聞かれた。勉強については、学部留学生在籍する工学部、及び生命環境学部の一年生前期の履修科目には、数学や物理、化学といった基礎科目や基礎ゼミが多いが、こうした科目の大半は必修科目である。こうした科目内容に関して、母国の高校で習ってこなかった、もともと苦手だったという者にとっては、入学当初から勉強の壁に当たってしまい、一年前期から授業単位を落として、やがて成績不振に陥る可能性がある。そのため、この入学後の早い段階で対策を提案し、その後の様子を見守っていつている。

3. 学部生への学修・健康チェック

後期に全学部留學生に対する学修と健康に関するアンケート調査を行った。学部新入生だけでなく、学年が上がっても、それぞれのステージならではの悩みや不安があるため、数年前から毎年行っている。調査は、2021年度に引き続き、2022年度も Google Forms で行った。調査結果がスプレッドシートに自動的にまとめられ、気になる回答を見出し、個別面談に結びつけやすいためである。

授業単位をいくつか落とした者が複数名あったが、その多くが問題を自覚し、解決方法も自分で見出せていた。ただ中には、卒業研究で期待する結果が得られず、指導教員に叱られるのを恐れて研究室に行けなくなった、先生に連絡ができないという学生もいた。順調に単位を取得してきたものの、研究で問題を抱え込んでしまい、研究室に出入りできなくなってしまうほど追い詰められてしまい、休学という形をとった。精神的なストレスから体調不良で医師にかかっている者が複数名おり、そのうち成績不振や休学に至るケースも見られた。このアンケート調査をきっかけに、留学生同士の間関係のストレスから心療内科に通院したいと申し出る者もおり、相談担当教員が通院に付き添った。日本語を母語としない留学生にとって日本語で医師に自分の症状を伝え、ストレス源である人間関係の問題を説明するのは容易ではなく、デリケートな心の悩みは友人や同国の先輩にも知られたくなかったようである。サポートが必要な場合には、相談担当教員や国際企画課の職員が付き添うことを伝え、留学生に日本で不安なく医療機関を受診してもらいたいと思っている。

4. 留学生ガイダンス・生活ガイダンス

新入留学生を対象に、2022年度は4月4日にガイダンスを行い、同日に、前期の日本語・日本語関連科目の履修を希望するすべての留学生を対象に日本語プレイズメント・テストを実施した。後期は、9月16日に日本語プレイズメント・テストを実施した。この時点で後期入学者がほとんど入国していない状態だったこと、そして後期入学者が国際交流会館または国際交流会館 ANNEX に入居する予定だったことから、後期入学者に対する生活ガイダンスを、国際交流会館及び ANNEX のオリエンテーションで行った。

4月の新入生対象の留学生ガイダンスでは、国際交流センター、及び国際部・国際企画課の教職員の紹介からはじまり、学年暦、本学で開講されている日本語・日本語関連科目、日本語 Intensive Course、日本語補講の説明のほか、留学生相談室やG-フィロスの紹介を行った。また、生活ガイダンスとして、新型コロナウイルス感染予防やゴミの分別、交通安全、災害への備えなどの説明を行った。

新型コロナウイルス感染予防の観点と、ウクライナからの留学生の受験、山梨県立大学の留学生の受験への配慮から、プレイズメント・テストは前期、後期ともオンラインで実施した。

II . 支援

1. 留学生チューター制度 / 留学生サポーター制度

山梨大学では、入学後1年目の留学生に対する支援制度として、チューター制度、サポーター制度、及び交流パートナー制度が設けられている。

留学生チューター制度は、入学後1年目の研究生、及び交換留学生に対して、留学生と同研究室の学生や受け入れ教員の推薦する学生が、一年間チューターとして勉学や生活上のサポートをするものである。2022年度前期は14名、後期は20名がチューターとして選出され、前期、後期ともオンラインで複数回説明会を開いて、謝金手続きに関する説明や活動方法、活動内容、活動する際の留意点などを、資料を基に説明した。2022年度は後期から、ウクライナのボリス・グリンチェンコ・キーウ首都大学より6名、ウクライナ大使館推薦で1名の計7名の学生を文部科学省日本語・日本文化研修留学生として国際交流センターの教員が受け入れ先となり、日本入国・未入国問わず全員にチューターを配置した。

留学生サポーター制度は、活動時間を10時間以内と限定した上で、学生サポーターとなった学生に、大学院留学生の入学当初の市役所や履修等の諸手続きの補助を行ってもらおうというものである。市役所や郵便局等での手続きは、煩瑣でサポートする側の負担も大きい。そのため、期間限定であるとはいえ、入学当初の諸手続きをサポートしてくれる学生に謝金を支払うこの「留学生サポーター制度」は、大学側の留学生支援の一環として2019年度から導入している。2022年度前期・後期とも各18名がサポーターとして、市役所での住民登録や印鑑作成、銀行口座の開設、携帯電話の購入などにおいてサポートをしてくれた。

また、成績不振や勉学に不安のある学部2年次以上の留学生に対しては、クラス担任の教員に面談してもらった後、同学年・同学科の学生や先輩学生をチューターとして推薦してもらい、当該留学生にとって難しい授業の勉強や課題作成の補助などをしてもらっている。この制度は2014年度から導入し、2022度は前期に4名、後期に1名の留学生がこの制度を利用して、クラスメイトや同学科の先輩学生から、苦手科目を中心に学習補助を受けた。チューターによる学習支援の対象となった2年次以上の留学生とそのチューターとは、留学生相談室で話し合いながら、その留学生に合った支援を一緒に考えた。同国の先輩留学生がチューターとなり、母国語で学習支援を行うことにより学習効果を上げただけでなく、当該学生の学習上の困難点をチューターが聞き出し、クラス担任の教員に相談するなどの連携支援にもつながった。

また、いずれのチューター、サポーターにも、チューターやサポーターとなった学生自身が活動の中での問題等を抱え込まないよう、CNSのコミュニティにおいて、気軽に相談できる窓口として留学生相談室を案内している。

2. 学部一年次外国人留学生交流パートナー制度

学部新入留学生に対する支援として、交流パートナー制度を導入している。

学部生にとって、同学年・同学科のクラスメイトの友人を作ることは、授業課題や試験対策などで助け合うだけでなく、大学生生活の様々な情報交換や交流の機会を得ることにもなる。そのため、これまでの大学院生によるチューター制度から、2014年度は同学年・同学科の日本人学生をチューターとする制度に、2015年度からは謝金を伴わないボランティア活動として交流パートナー制度に改めた。交流パートナーの日本人学生は、要件を満たせば、自発的教養科目(ボランティア活動)の1~2単位を取得できる。同じクラスメイトの日本人学生が、留学生の交流パートナーとなり、留学生のクラス内での仲間づくり・居場所づくり、及び学生間の協働学習促進の一助を担っている。

2022年度は、10名の学部1年生の留学生に対し、17名の交流パートナーがつき、対面での説明会、及び交流会を開催した。7月24日には富士山方面、2月6日には静岡方面へのバス旅行で親睦を深めた。7月の交流旅行では、学科ごとのグループで一緒にほうとう作りを体験し、協力して粉をこねて丸めて切ったほうとうを、お店で調理していただき、昼食として食したり、ハンカチ染を体験したりした。2月の交流旅行では、学科ごとにテ-

ブルにつき、握り寿司を自分たちで握って食する体験をした。また、いちご大福を作る体験では、餡の量やいちごの包み方に個性が現れ、上手だ、変だ、美味しいなど言い合いながら楽しい交流体験となった。



ほうとう作り体験



ハンカチ染体験



いちご大福包み体験



寿司ミュージアムにて

3. 国際交流会館/ ANNEX / 甲斐路分館

2022年度は4月19日に国際交流会館、20日に国際交流会館 ANNEX のオリエンテーションを、国際交流会館2階の多目的ホールにて開いた。オリエンテーションでは、会館チューターの学生が、日本語と英語で、寮費や光熱費の支払い方法や共同キッチンや洗濯室、ロビーの使い方、ごみの出し方、非常時の避難場所などについて説明した。また、大学職員からは、会館内のWiFiを皆が安全にスムーズに使用できるよう、インターネット使用における注意喚起を行った。

後期は、新入生の入寮が落ち着いた10月27日にオンラインでオリエンテーションを開いた。新入生に対しては入寮した時点で、説明会に先立ち、当面必要な案内を、寮の担当職員や会館チューターが個別に説明した。また、4月の新入留学生向けに行った生活ガイダンスを、後期入学者・入寮者を対象に、オンラインで日本語と英語で行った。生活ガイダンスでは、新型コロナウイルス感染予防策のほか、主に自転車の交通ルールと自転車の保険への加入、近所トラブルとなる生活騒音やゴミの出し方、災害への備えなどについて説明した。寮の担当職員からは、前期と同様に、インターネット使用における注意喚起を行った。

新型コロナウイルスのPCR検査や抗原検査で陽性反応が現れた寮生は、自室や国際交流会館の家族室で待機させ、他の寮生と接触しないようにし、課の職員が様子を確認しながら寮内でクラスターが発生しないよう努めた。

4. 留学生のための防災教室

甲府市による防災教室は、新型コロナウイルス感染防止の観点から、2022年度も中止となった。

5. 留学生のための防犯講話

甲府警察署による防犯講話を7月29日16時45分から実施した。当初は対面での実施を予定していたが、コロナ感染の懸念からオンラインでの実施に切り替え、約40名の留学生が聴講した。甲府警察署の芦沢巡査部長

より、日本で安全に安心して暮らせるよう注意してもらいたいこととして、空き巣や痴漢、自転車の交通規則、危険ドラッグ、大学付近の交番や警察署の場所、連絡方法などを、英語表記のスライドを用い英語を通訳を交えて、分かりやすく説明していただいた。



甲府警察署による留学生のための防犯講話

Lecture on Crime Prevention

日本は世界の中でも治安の良い、安全な国と言われていますが、山梨県でも毎年多くの犯罪が起っています。また、最近、留学生を狙った詐欺事件や留学生の関わる交通事故も増加しています。そこで、皆さんが安全な生活を送れるように、甲府警察署の方に防犯について講話をいただきます。



Japan is considered to be a safe country, but even in Yamanashi Prefecture, there are many crime cases reported every year. In addition, the number of fraud cases targeting international students and car/bike accidents involving international students is remarkably on the increase. For your safe study life in Yamanashi, the Kofu Police will provide you with a lecture on crime prevention as follows:

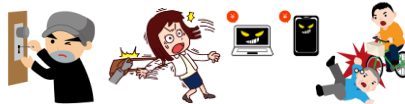
DATE : 2022/7/29 (FRI)

TIME : 16:45-17:45

PLACE : M-11, M Building



Application Form



当日は出席をとります。必ず出席してください。

We will take attendance on the day. All members, please make sure to attend this lecture.

Ⅲ . 文化交流

例年行われてきた「ホームステイ/ホームビジット」「留学生の実地見学旅行」「岩窪自治会との地域餅つき会」は、新型コロナウイルス感染防止の観点より中止となった。

「留学生の華道体験」については、感染対策をとりながら、本学の華道部の協力を得て、甲府キャンパスの大学祭に合わせて11月4日に行い、12名の留学生が参加した。「活ける人の感性を生かして活かしてほしい」という華道部顧問の跡部由喜先生のお話を受け、跡部先生や部員の学生たちに手ほどきを受けながら、参加者たちはユリ、リンドウ、ソリダコ、アレカヤシという4種類の花材を、それぞれ思うように活かしていた。



2. 山梨留学生就職促進プログラム（通称：IRCS）

本学は令和2年度から文部科学省委託事業「留学生就職促進プログラム」の一環として「山梨留学生就職促進プログラム」を実施しています。以下は令和4年度におけるプログラムの活動報告です。

山梨留学生就職促進プログラム

― 活動の概要と令和4年度の取組状況 ―

伊藤 孝恵・布村 猛

本章においては、令和4年度の活動報告をするにあたり、プログラム全体の概要、目的を概観する。そのうえで、令和4年度における活動に焦点を当て、活動内容、及び成果・課題について述べる。

1 「山梨留学生就職促進プログラム」の概要

本プログラムは、令和2年11月に文部科学省の委託事業「留学生就職促進プログラム」に採択され、スタートした。令和4年度には、ポイント制度を導入するなどプログラムをさらに発展させ、文部科学省の留学生就職促進教育認定制度において認定を受けた。

本プログラムは、令和5年3月末の委託事業期間終了後も、留学生就職促進教育認定制度の下、継続していく。

1.1 「山梨留学生就職促進プログラム」の目的

本学は、「地域の中核・世界の人材」を旗標に、第三期中期計画（平成28年度～令和3年度）に従って、海外から多数の留学生を受け入れ、エネルギーや医工学分野の融合研究を積極的に推進してきた。令和元年度からはダブルディグリー制度を活用した、AI、IoT、ロボティクス分野の充実が顕著である。その一方で、地域に目を向けると、基幹産業であるロボティクスや機械電子工業は深刻な人手不足に苛まれている。このような地域のニーズに応えるべく、山梨県・甲府市・県内企業団体と産学官三位一体のコンソーシアムを構成することにより、独自の「イノベーション・研究駆動留学生就職促進プログラム」を提案し、留学生人材による地域産業の問題解決を図ると同時に、キャリア教育の組織化による国内就職率のさらなる向上と他大学への波及効果を狙うことを目的とする。

1.2 プログラムの中心となる2つのトラック

本節では、プログラムの特徴である2つのトラックと教育における3本の柱についてその活動の内容に触れながら紹介をする。

本プログラムの最大の特長は、科目の新設・拡充により日本語教育、キャリア教育、企業理解教育の各教育カリキュラムを整備し、地域に根差した学びの場を提供することにより、留学生の県内外企業への就職へつなげることにある。

本プログラムには2つのトラックが設けられている。このうち「イノベーション駆動トラック」は、入学時にすでに日本語能力がN2レベルに達している留学生を対象とし、日本文化理解の上にグローバルな視点と豊かな発想力を備えた高度外国人材として日本国内での活躍を目指す。大学の開講科目の活用のほか、コンソーシアム参画企業・団体の協力のもとでのビジネスマナーや企業文化を学ぶ講座やセミナー、インターンシップや、地域人材養成センターの課題解決型プロジェクト「フューチャーサーチ」への参加などを通じて、体系的に就職に向けた準備を行っていく。

一方「研究駆動トラック」は、英語対応コースに入学する大学院生を対象とし、入学時に最低でもN4レベルの日本語力を有してもらうため、渡日前に半年間300時間の日本語強化コースを提供するとともに、入学後も日本語学習を集中的に継続し、修了時にはN2レベルの日本語力をつけることを目指す。その上で、AI、IoT、ロボティクス分野を中心に、学域の所属研究室と企業との共同研究の場を提供し、顧客への訪問やミーティングでの

日本語プレゼン、他部署とのディスカッション等から、実践的な日本語の習得や企業文化理解を育んでいく。

以上が、本プログラムの中心となる2つのトラックである。

1.3 プログラムを支える3本の柱

次に教育における3本の柱である「日本語教育」「キャリア教育」「企業理解教育」について述べる。

1.3.1 日本語教育

プログラム開始前における課題として、大学院生、特に英語対応コースの大学院生は、日本で就職という段階において、ビジネス日本語はもとより、日常生活レベルの日本語もままならないという点があった。また、学部生は、アカデミックジャパニーズを中心とした学部開講科目で、基礎的かつ汎用性の高い日本語を習得する一方、就職に有利となる JLPT や BJT といった日本語の試験対策や、ビジネス日本語、ビジネスマナーを学ぶ機会が持てずにいた。

これらの課題を解決するために、まず、英語対応コースに入学予定の大学院生については、入学時に N4 レベルに到達できるように、渡日前に半年間日本文化・日本事情を題材としながら 300 時間の日本語強化コースをオンラインで提供する。さらに入学後も、夜間と土曜日を利用して計 300 時間の集中強化を施し、修了時には N2 レベルを保証する。

また、JLPT や BJT の対策講座や、ビジネス日本語、ビジネスマナーを学ぶ機会を提供し、就職活動や就職後において活用できる日本語教育を行う。

以上が「日本語教育」の概要である。

1.3.2 キャリア教育

「キャリア教育」については、本学で開講されているキャリア関連科目を本プログラムに有機的に取り入れることにより、留学生が複数のアプローチで自分のキャリアビジョンを思い描けるよう、プログラムをデザインした。具体的には、イノベーション駆動トラックでは、本学の共通教育科目として開講されている「キャリアデザインⅠ（自己理解）」「キャリアデザインⅡ（仕事理解）」を勧めるほか、後述する国際交流センター（2023年1月より国際化推進センター）が実施するキャリア教育を行う。また、学部3年生、修士1年生の留学生に向けては、自己分析や業界研究、企業研究などのセミナーやワークショップを行いエントリーシート作成等につなげるほか、筆記試験対策や面接対策といった実践対策も講じていく。また、留学生は日本で働いているロールモデルが少なく、日本で働くイメージ作りや就職活動が困難だという課題への一助として、先輩元留学生から話を聞く機会も設ける。研究駆動トラックでは、メンターの役割を担う共同研究者を割り当て、その交流を通してキャリアについて真剣に考えられるような機会を提供する。

以上が「キャリア教育」の概要である。

1.3.3 企業理解教育

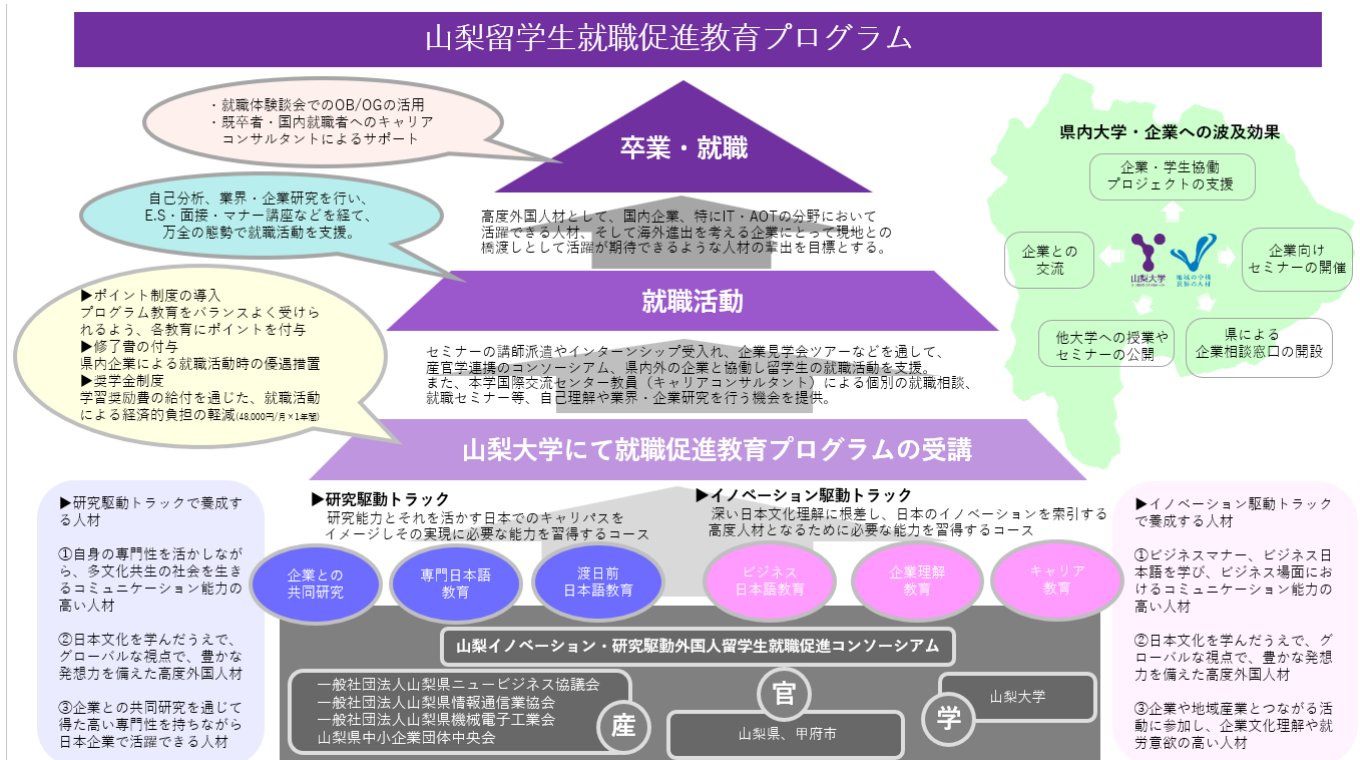
日本企業で働く上で、日本の企業文化や日本人の価値観、日本の慣習に対する理解、及び文化の相違を認め合い交流できる力の涵養が大切であると考えます。

「企業理解教育」についても、日本文化理解や異文化理解に関する本学の共通教育科目である、「日本事情Ⅰ」「日本事情Ⅱ」「Language and Communication」を本プログラムに取り入れている。また、実際に企業の方から企業文化を学ぶ機会として、コンソーシアムの企業・団体から講師を派遣してもらい、日本の企業文化に関するセミナーも開催する。企業見学会やインターンシップは、企業の様子やそこで働くイメージが掴みやすい上、企業の方との直接的なやり取りも多く、日本の企業を肌で実感し理解するのに最適な機会といえる。このような企業見学会、及びインターンシップも、コンソーシアム参画の企業・団体、及び自治体の協力のもとで留学生に

提供する。

さらに、地域人材養成センターの「未来計画研究社」が主催する「Mirai プロジェクト」には、参加企業・団体と学生が各プロジェクトに協働で取り組んで成果を発表するプロジェクト型の授業科目「フューチャーサーチ」がある。この「フューチャーサーチ」への参加も、本プログラムで積極的に勧め、地域人材養成センターと連携して、留学生の指導・支援にあたる。これにより、留学生が企業とともに主体的に地域のプロジェクトに関わることで、企業関係者との交流の機会がもてるだけでなく、県内の観光や産業への理解・関心、ひいては県内企業への就職へとつながることが期待できる。

以上が「企業理解教育」の概要である。



2 令和4年度の取組状況

本章では、令和4年度に行った活動について具体的に述べる。プログラムの柱である「日本語教育」「企業理解教育」「キャリア教育」において行った活動をそれぞれ具体的に報告する。

まず、山梨留学生就職促進プログラムの3本の柱である「日本語教育」「キャリア教育」「企業理解教育」についてその活動と成果を報告する。

2.1 日本語教育

2.1.1 渡日前日本語教育と専門日本語教育

令和2年度に渡日前の日本語強化コースとして、intensive 夏期／冬期集中講座を新たに開講した。これにより英語コース入学予定の学生が、渡日前に日本語能力試験（以下、JLPT）N4 レベルまで到達することが可能となった。英語コースの学生が修士課程を卒業した段階で就職をしようとする場合、2年間で日本語を学習し、研究をした上で、就職活動に臨まなければならない。渡日前の、研究が本格的に始まっていない時期に集中的に日本語を学ぶことで、来日後は研究と就職活動、そして、それらに直接つながるような、より専門性の高い日本語の学習に時間を割くことが可能となった。本プログラムでは、渡日前及び国内での日本語コースとして、intensive 夏期／冬期集中講座にて、210 時間、来日後の会話練習クラスにて 45 時間、また、専門日本語教育として intensive 初級クラスにて 150 時間、計 405 時間の日本語教育を、日本語学習経験がない留学生に必修科目として提供した。

2.1.2 JLPT 対策講座

令和3年度からは、令和2年度に試行した「JLPT 対策講座」の提供に本格的に着手し、主に研究駆動トラックの学生を対象にN3対策講座を開講した。令和4年度後期にはJLPT N2・N3・N4対策講座を週に1度15週間にわたって科目外の講座として開講し、延べ15名の学生が参加した。参加学生全員が令和5年7月試験の受験を予定しており、受験者数増加への貢献が期待される。

また、既にJLPT N2レベル相当の日本語力を有する学生については、N1レベルへのスキルアップやビジネス場面における表現力・運用力を身につけるべく、令和3年度にはJLPT N1対策講座を開講した。さらに、令和4年度には、JLPT N1対策をより重点的に提供すべく、N1対策講座を「日本語L&R」として科目化した。これには、本プログラム非参加学生を含めて、24名の留学生が参加した。

2.1.3 学部開講科目

初中級から上級までの4レベルの日本語の学部科目を、プログラムに組み込み、各年度13～15科目提供している。学部開講科目で学んだ基礎的かつ汎用性の高い日本語は、インターンシップ先における社員との交流やプレゼンテーション、就職活動におけるエントリーシートや採用面接などで活かすことができた。

また、令和4年度より、「日本語L&R」と「ビジネス日本語」を学部開講科目として新設した。

2.1.4 ビジネス日本語講座

これまで本学で開講されてきた日本語科目は、アカデミックジャパニーズを主軸とした内容であり、いわゆるビジネス日本語を学ぶ授業は開講されていなかった。そこで、本プログラムが立ち上がった翌年度の令和3年度には、イノベーション駆動トラックの学生を対象に、8回シリーズでビジネス日本語講座を開いた。令和4年度はこれを足掛かりとして「ビジネス日本語」を単位化して、学部科目として開講した結果、本プログラム以外の留学生も履修を希望し、計32名の留学生が受講した。

また、令和4年度もBJT対策講座を2回実施し、計23名が参加した。この講座は、JLPT N1相当の日本語力を有する留学生が、ビジネス場面での運用力を伸ばすほか、JLPT以外の日本語の資格取得を動機づける狙いもある。BJTを主催する公益財団法人日本漢字能力検定協会の担当者の方からBJTの特徴をご案内いただいた後、BJTの聴解、聴読解、読解の練習問題を通じて、ビジネス場面の会話表現やビジネス文書の読み取り方などを学んだ。

また、ビジネスマナーを学ぶ講座を令和4年度は4回開いた。第一回目と第二回目は、一般社団法人山梨県ニュービジネス協議会より、依田恵美先生をマナー講師としてお招きした。7月7日に開催した第一回目では、人に良い印象を与えるコミュニケーションの基本や心構えを分かりやすく教えていただいた。コミュニケーションで大切な「挨拶」「笑顔」「態度」「身だしなみ」「言葉遣い」の5つの要素について、それぞれの大切さとよい印象を与えるポイントをお話いただいた後、立ち方、声の出し方、表情の作り方、お辞儀の仕方などの実践指導を受けた。10月28日に開催した第二回目では、対面やオンラインで行う面接の仕方を教えていただいた。11月18日に行った第三回目には、株式会社雅の淡路美香先生から、役職の呼び方などの、日本企業に就職するために必要なマナー、就職してから必要なマナーを教えていただいた。令和5年2月24日の第四回目には、株式会社満足屋石和店様のご協力のもと、メンズスーツ、レディーススーツの選び方や着こなし方などを教えていただいた。実際に、本学の留学生がモデルとなって、お店の方からスーツなどを着せていただいたほか、店舗から持ち込んでくださったたくさんのスーツやバッグ、靴など、実物を手に取りながら、お店の方から選び方のポイントを教えていただくこともできた。このように、コンソーシアム参画団体の協力のもと、ビジネスマナーに精通した外部講師から直接教わることにより、日本語の授業内で学ぶことの難しいビジネスマナーを体験的に学ぶことができた。



第一回ビジネスマナー講座



第二回 ビジネスマナー講座



第三回ビジネスマナー講座



第四回ビジネスマナー講座

ビジネス日本語コンテストは、令和3年度に引き続き、令和4年度も、インターンシップ報告会と兼行し、22名の留学生在が参加した。留學生はそれぞれのインターンシップの成果を企業の方に直接報告し、企業の方からプレゼンテーションを評価していただいた。これにより、ビジネス場面における、自身の日本語力がどのように評価されるかを経験的に知ることができた。



ビジネス日本語コンテストの表彰式

2.2 キャリア教育

2.2.1 キャリアデザイン

留學生が日本で働く将来像を思い描き、その実現に向けた準備を行えるよう、留學生の状況に合わせた教育・支援が必要である。日本人学生と異なり、日本にロールモデルとなる社会人が身近に少ない留學生にとって、日本で働くイメージや、5年後、10年後の自分のキャリアビジョンが描きにくい。また、日本の企業文化や就職市場の動向、就職活動のノウハウなどの情報不足、理解不足も相まって、日本での就職活動が思うように進まないことが多い。そのため、留學生の自己理解や仕事理解を深める教育とともに、日本の就職活動に必要な知識やノウハウの提供も必要となる。

本プログラムでは、イノベーション駆動トラックの学生に対し、学部開講科目の「キャリアデザイン I（自己

理解) 」」及び「キャリアデザインⅡ (仕事理解) 」を取り入れ、自分のキャリアについて考え、仕事への理解を深める機会をより多く提供した。また、プログラムとしても独自に、令和4年度には前期に「キャリアデザイン演習」(5回)と「キャリア分析演習」を、後期に「就職ガイダンス」「就職活動理解・自己理解セミナー」「自己理解ワークショップ」「業界・企業研究」「志望動機ワークショップ」「OBによる卒業体験談会」「就職相談会」を開催した。また、就職活動でのスキルをつけるため、「SPI対策講座」(3回)、「SPI対策講座」(4回)、「面接対策講座」(2回)を開いた。

これらの講座やセミナーの多くは、留学生の就職支援や求人を専門に扱う機関・企業から講師を招いた。これにより、従来毎年の開催を困難にしていたマンパワー不足の問題を解消し、令和4年度は延べ200名以上の留学生にキャリア教育を提供することができた。

キャリア分析演習

6月2日に、日本キャリア開発協会の「金の糸」という自己理解ルールを用いたワークショップを開催し、15名が参加した。これからのキャリアビジョンを描く際の、(自分がこれまでの人生で大事にしてきた変わらぬ価値観や態度は何だろう)という問いに、すごろくゲームをしながら考えていくものである。4、5人のグループに分かれて、幼少期からの出来事を互いに語りながら、それぞれの気づきをワークシートにまとめて発表した。この演習で見出した「金の糸」(自分らしさ)は、将来のキャリアデザインをする時に自分の強みやキャリアアンカーとしても活かせると思う。

キャリアデザイン演習

6月15日から5週に亘って、オンラインで「キャリアデザイン演習」を行った。外国人留学生の就職支援、企業の外国人採用サイト「リュウカツ」でおなじみの株式会社オリジネーターの須藤歩氏を講師としてお招きし、各回留学生に役立つテーマでお話をいただいた。各回とも、学生たちが自ら調べたり、自分の意見や経験などをまとめたり発表したりする機会が設けられ、実践的な学びの場ともなった。5回で延べ70名ほど学生が参加した。各回の主な内容は以下の通りである。

第一回目：「日本で働くことへの理解」「企業が提供する研修や制度」「母国で働くこととの比較」

第二回目：「留学生を採用する企業」「自分にあった企業・仕事の選び方」

第三回目：「製造業の業界・職種」「企業研究のやり方」

第四回目：「非製造業の業界・職種(IT、コンサルタント)」「自己分析について」

第五回目：「ESの書き方質問の種類や良い例・良くない例」「自己PR、学生時代に頑張ったこと、研究内容、志望動機フォーマット」「上手なコミュニケーションの方法」

就職ガイダンス

12月9日の「就職ガイダンス」は、山梨県外国人活躍推進グループが主催となって開催され、22名の留学生が参加した。一般社団法人留学生支援ネットワーク事務局長の久保田学氏より、日本の就職活動の特徴やSPI、CAB、GABといった筆記試験の対策方法、エントリーシートの作成や面接のポイントなども教えていただいた。

就職活動理解・自己理解セミナー、自己理解ワークショップ

12月16日に就職活動理解・自己理解セミナーを、12月23日に自己理解ワークショップを、それぞれ株式会社オリジネーターの須藤歩氏を講師とし、オンライン開催し、計32名が参加した。

セミナーでは、留学生の就職活動の特徴と問題点や、就職に必要な情報収集の仕方、履歴書とエントリーシートの書き方などを教えていただいた。ワークショップでは、自己理解ツールの診断結果をもとに話し合った後、自分の強みを志望企業の求める特性を踏まえて説得力をもって伝えるための書き方について、事例検討から学んだ。

業界・企業研究、志望動機ワークショップ

令和5年2月10日に業界・企業研究を、2月23日に志望動機ワークショップをオンライン開催し、計27名が参加した。講師の須藤歩氏より、業界研究の重要性とその方法についてご説明いただいた後、日本版O-NETな

ど業界や職業を調べるサイトや企業の HP の見方なども教わった。どのような職業があるのかよく知らない、なかなか自分に合った企業が見つけれないといった悩みを抱える留学生にとって、大いに参考になったようだ。

ワークショップでは、志望動機の事例検討のほか、実際に自分たちで志望動機を書いてフィードバックし合った。志望動機は、エントリーシートの要であるだけに、実際に書くポイントを教えていただき、自分が書いたものにフィードバックがいただける機会は貴重であった。

OB による就職体験談会

令和 5 年 2 月 17 日に、本学の卒業留学生による就職体験談会を開催した。就職活動や入社後の様子、転職について、ご自身の体験談や在学生へのアドバイスをいただいた。豊富な仕事経験から、在学生からの質問にも具体的に説得力をもって答えていただき、参加した学生には頼もしいロールモデルとして映ったと思う。

就職相談会

令和 5 年 3 月 29 日に、プログラム参加者同士の相談・交流会を開催した。本プログラムは、令和 4 年度末で文科省からの受託期間が終了した後も、文部科学省の「留学生就職促進教育プログラム認定制度」のもとで継続していくことになるが、一つの区切りとして、これまでのプログラム内容や就職に向けた各々の活動を振り返る機会を設けた。相談会に参加した 15 名の学生からは、「ビジネスマナーや敬語を身につけることができた」「自分の専門分野以外の業界や企業を知ることができた」「自分の将来を考える材料をたくさんもらった」などの感想が聞かれ、本プログラムが留学生一人一人の日本での就職への足掛かりとなったようである。



就職相談会

2.2.2 就職スキル対策

SPI 対策講座

留学生にとって日本の就職活動で大きなハードルとなるのが、筆記試験である。このうち SPI について、留学生向けの SPI 対策本を出版していらっしゃる、株式会社明光パートナーズより講師をお招きして、1 月 16 日から 2 月 27 日までの間に全 4 回、オンラインで SPI 対策講座を開催した。学部 3 年生、修士 1 年生を中心に延べ 38 名が参加した。

全四回の内容は以下の通りである。

第一回目：SPI 概論、模擬試験

第二回目：適正検査、自己分析

第三回目：SPI 実践練習—非言語—

第四回目：SPI 実践練習—言語—

面接対策講座

令和 5 年 3 月 22 日、28 日に、面接対策講座を開催した。参加者には採用面接で必ず質問される「自己紹介」「自己 PR」「学生時代に力を入れたこと」「志望動機」に対する回答を考えてきてもらい、最初に、他の参加者を面接官と想定して準備してきたことを話し、実際に人前で話すことの難しさを体験してもらった。その

後、他の参加者からのフィードバックと面接対応の参考動画によりポイントを学習した後、もう一度皆の前で発表した。講座の最初と最後では、見違えるほど改善され、これから採用面接に臨むにあたり大きな自信につながったようである。

2.2.3 キャリアインベントリー

研究駆動トラックの学生に対するキャリア教育は、企業との共同研究において、現場体験や企業担当者との話し合いや助言を通じた、自己理解や仕事理解が主であった。

しかし、プログラムを実施する中で、学生が日本の就職活動について知る機会、そして自身の日本でのキャリアを検討する機会を、大学からも提供する必要があると判断した。そこで令和4年度は「キャリアインベントリー」という授業外講座を実施した。来日1年目の学生には日本の就職活動への臨み方についてガイダンスを行い、2年目の学生には、企業との共同研究を通じ、どのような企業でどのような能力が発揮できるかを内省する時間とした。これにより、指導教員の紹介や、共同研究先の企業に就職するという受動的な就職活動から、自身が志望する企業を定め、そこに採用されるように努力を重ねていくという能動的な姿勢で就職活動に臨めるようになった。

2.3 企業理解教育

2.3.1 インターンシップ

本プログラムにおいては、インターンシップの受け入れ企業を山梨県内で開拓し、留学生の就職の選択肢の拡大を図ることが目標の一つにあった。インターンシップは、学生が日本企業で働くということについて、実際の経験を通じてイメージできると同時に、受入れ企業においても、留学生を採用した際のイメージを得られる点が大きな魅力である。山梨県内には留学生の雇用実績がなく、すぐに留学生の採用に踏み切ることができない企業が数多くある中で、採用への足掛かりとして、採用よりもハードルの低いインターンシップの受け入れという選択肢を提供することは重要であった。

コロナ禍の影響で、長期（1か月）インターンシップが、2週間に短縮される、あるいは急遽対面からオンラインへ変更されてしまうなど、計画の変更を余儀なくされた学生もいたが、令和4年度は県内企業9社に10名（県外、オンラインを含めると計16社16名）を派遣することができた。

また、本プログラムにおいては、インターンシップの受け入れ企業の数だけでなく、受け入れ期間を拡大することも目標としてきた。令和4年度は、6名が20日間以上の長期インターンシップに参加した。残念ながら、県内企業における長期のインターンシップの受け入れは1社のみとなかったが、イノベーション駆動トラックからは、各々の興味に応じて約9か月間参加する「フューチャーサーチ」に7名の学生が参加し、県内の各企業・団体のニーズや課題に基づいて、プロジェクトに社員として参加し、企業と協働で課題を解決した。

インターンシップ受け入れ企業の拡大に向けた取り組みとして、本学キャリアセンターには企業と面談する際に、本プログラムの紹介を積極的に行ってもらったほか、本プログラムの担当職員が、各インターンシップ先に足を運び、留学生の様子把握し、企業の担当者や留学生の受け入れ状況の改善に向けた話し合いを重ねたことがある。その結果、留学生がインターンシップに参加しやすいように、最寄りの駅までの毎日の送迎や、アルバイトとしての継続な雇用が実現するなど、積極的に受け入れる企業が増え、少しずつではあるが、留学生のインターンシップが県内企業にも浸透してきた。また、有給でのインターンシップ受け入れを実施する企業を開拓することもできた。このように、留学生にとってインターンシップ先の選択肢が拡大し、また経験できる業務の内容においても充実したインターンシップを経験できる体制が整備された。

インターンシップの成果として、令和3年度に引き続き、令和4年度も11月の第一金曜日にインターンシップ報告会を開催した。

インターンシップ報告会では職場のメンターや直属の上司も招待し、学生一人一人の発表に対して講評してい

ただいた。これにより、学生のインターンシップを通じた学びをより確かなものにできたと同時に、インターンシップを通じた留学生の成長を目の当たりし、企業側の受入れのモチベーション向上にもつながった。報告会後の交流会では、企業・団体関係者と留学生とがインターンシップを振り返りながら、留学生の国との文化の違いや将来に向けたエールなどを交えて談笑する姿が見られた。

企業と留学生、そして本プログラムのコンソーシアム参画団体との間で相互理解が深まり、今後につながる有益な機会となった。



インターンシップ報告会

2.3.2 地域人材養成センターと連携した Mirai プロジェクト

令和3年度以降は、「Mirai プロジェクト（フューチャーサーチ）」をプログラムに組み込み、令和4年度からは課題解決型の長期インターンシップとして提供した。令和4年度は7名が参加し、県内大学生と共に、地域や企業の抱える課題を理解し、その解決・改善に向け協働的に取り組んだ。その中で、6月から翌2月までのおよそ9か月間に、2度の進捗報告会と2月の成果報告会があり、これら全てにおいて留学生も日本人学生とともにスライドやポスターの作成やプレゼンテーションを行った。こうした一連の取り組みから、自分の学びと今後の展望を明らかにするとともに、企業・団体の方や他大学の学生との日本語によるコミュニケーション力やプレゼンテーション力を育成する機会をもつことができた。



フューチャーサーチ進捗報告会

2.3.3 インターンシップ以外の企業文化・日本文化理解の促進

本プログラムでは、インターンシップ以外にも、企業文化や日本文化理解を促進する場を提供してきた。

イノベーション駆動トラックでは、学部開講科目の「日本事情Ⅰ」「日本事情Ⅱ」を本プログラムに組み入れたほか、「企業文化セミナー」を2回開催した。また、研究駆動トラックでは、「企業理解演習」を実施したほか、両トラックの学生に対し、「企業見学会」を行った。

「日本事情Ⅰ」「日本事情Ⅱ」

日本事情を学ぶ教育機会の提供としては、学部開講科目の「日本事情Ⅰ」「日本事情Ⅱ」を本プログラムに組み入れた。これにより、日本人学生とのグループディスカッションを通じて、留学生が日本人の価値観や習慣を、自国のそれとの比較文化的視点をもって理解することを可能とした。

「企業文化セミナー」

「企業文化セミナー」では、日本の企業文化や日本人の就業意識、価値観などについて、企業の人事担当者から話を聞くことにより、日本企業に対する理解を深め、日本で働くイメージづくりを行う機会を提供した。

11月11日には、山梨県産業労働部産業人材育成課コーディネーターの鈴木義房様を講師としてお招きし、15名が参加した。「山梨の魅力を知り山梨の企業を見つける」をテーマに、県内企業の探し方や企業の紹介例、就職活動をする学生に企業が求めていることなど、就職に必要なことを教えていただいたほか、グループディスカッションでは、参加者同士で働く目的や意味などを話し合った。留学生にとって、県の魅力や県内企業での就職のイメージが伝わるセミナーとなったようである。

また、令和5年1月13日はフォネットグループ様より事業内容をご説明いただき、20名が参加した。コロナ禍で急遽オンライン開催へと変更となったが、複数の事業拠点から中継で事業内容をご案内いただいた利点もあった。賞品をかけて理解度確認クイズなど、楽しく分かりやすい工夫の数々に、留学生は企業をよく理解することができたと思われる。

企業理解演習

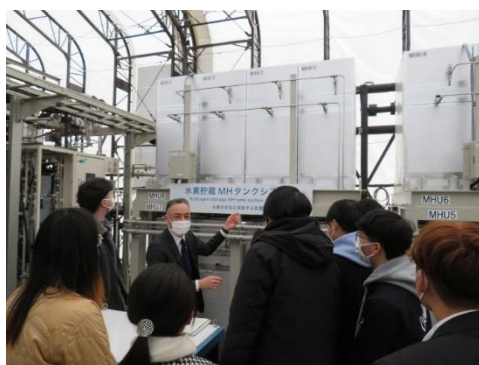
研究駆動の学生は、企業との共同研究を通じて就職をすることが多く、一般的な就職活動と異なるルートで就職するケースが多いと考えていたが、令和3年度には、一般的な就職活動に挑戦し内定を獲得した留学生が数名いた。そこで、令和4年度から、理系大学院に通う留学生のための就職サイトを紹介するなど、英語でも効率的な就職活動ができるような実践的な指導を行った。これにより、研究駆動の学生が、指導教員からの紹介を待つという受動的な就職活動ではなく、主体性を持った能動的な就職活動に取り組みやすくなった。

企業見学会

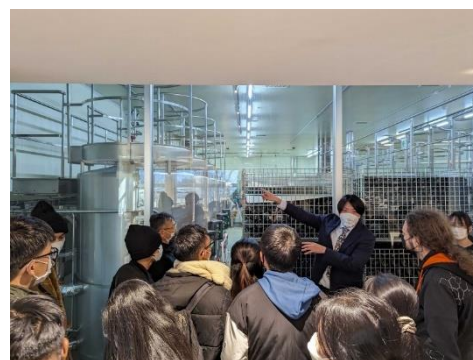
企業見学会については、令和2年度は山梨県内の企業4社を見学した。令和3年度は、受入れ企業の数を8社まで増やし、学生が自身の専門や志望業界に合わせて見学企業を選択できる体制を整えたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、実施直前になって中止を余儀なくされた。

令和4年度は受入れ企業数を9社にして、令和5年2月に実施し、延べ78名の学生が参加した。このうち二日間に亘る4社の見学会は、甲府市のふるさと納税により実現した。

企業見学会においては、留学生が日本企業を知る機会を提供することに主眼をおいていたが、企業見学先の企業が、その後のインターンシップの受入れ先となるなど、継続的な効果がみられた。このような点において、企業見学会は、企業側も留学生を知り、その後の留学生の受入れにつながる機会としても効果的に機能しうることが示唆された。



電力貯蔵技術研究サイト



MGV s (マグヴィス) ワイナリー



(株) キトー



アリメント工業 (株)

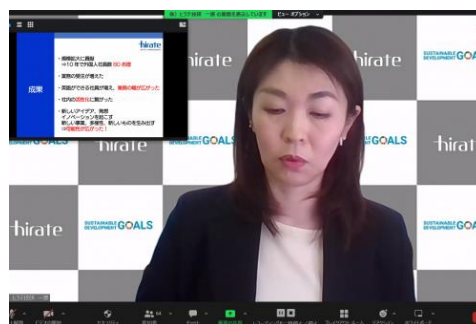
3. 県内企業に対する取り組み

県内企業の高度外国人材雇用の啓発、支援に向けた取り組みとして、令和3年度より企業向けのセミナーの開催や、相談・問い合わせ窓口の設置をしている。

令和4年度は、製造業を中心とした県内企業に向け、人手不足の問題解決の一助として、外国人材雇用を提案する「外国人留学生雇用促進セミナー」を令和5年1月20日に開催した。このセミナーでは、多様な労働形態で多くの外国人材を雇用し、外国人材の支援体制を確立している株式会社ヒラテ技研様を講師として招き、「10年後を見据えた採用～外国人材の採用という選択～」というタイトルで、外国人材を雇用する契機や、雇用の工夫、活用事例などについて具体的なお話をいただいた。「なぜ、外国人材を採用することになったのか」といった実際的な意識転換と、雇用の安定に向けた試行錯誤の具体的な取り組み事例は、同じように人材不足という問題を抱える県内企業にとって、分かりやすいロールモデルとなり、大変有益な話であった。

また、セミナーでは、山梨県外国人材企業相談センターアドバイザーで特定行政書士の加々美一雄氏より、留学生を採用する際の在留資格と公的機関の支援のポイントなどを教えていただいた。留学生の教育、送り出しを担う大学からは、本学キャリアセンターの山本和美先生より、本学におけるキャリア教育やインターンシップ、就職支援等の状況や、最近の就活生の特徴や動向などを、地域人材養成センターの渡辺喜道先生からは、企業と学生が出会う方法、大学で行っているイベント等を教えていただいた。労働人口の減少が深刻な問題となっている日本社会において、今回のセミナーを機に、外国人採用企業が増えることを期待している。

ホームページなどから本プログラムのことを知り、留学生の就職に関する問い合わせや相談が、企業から寄せられることも増えてきた。企業と留学生双方の特徴やニーズを共有し、内容に応じて、本学のキャリアセンターや県の窓口の紹介などを行っている。



4. 今後のプログラム運営に関する取り組み

4.1 コンソーシアムの維持

令和4年度末をもって委託事業としての本プログラムが終了した後も、コンソーシアムの体制は維持し「山梨留学生就職促進教育プログラム認定制度」として、少なくとも令和8年度まで事業を継続していくことを、コンソーシアム所属各団体と確認した。特にこのような事業が2年という短期間で大きな成果が出るものではないことはコンソーシアム内で十分に共有されており、長期にわたる支援の必要性を各団体が十分に理解している。本学においては、本プログラムのために採用した国際交流センター（2023年1月より国際化推進センター）の特任教員の雇用も継続し、プログラム運営に必要なマンパワーを維持できるよう努力した。

また、文部科学省の委託終了後も、学内経費が措置され、山梨留学生就職促進プログラムで提供していた日本語教育のプログラムは継続ができるように調整をしている。

4.2 プログラム運営費の確保

令和5年度以降も、この2年間とほぼ同等の教育プログラムの提供と留学生の参加を維持・拡大するためには、一部の教育を外部委託するための運営資金と奨学金の確保が必要である。「留学生就職促進教育プログラム認定制度」で受けられる奨学生枠数以上の参加と、新たに海外から優秀な人材を呼び込み、日本国内就職の拡充を促すためにも、運営資金や独自の奨学金のための基金や制度が必要であり、そのための準備を進めている。

基金の設立にあたり、コンソーシアム内の各企業から、キャリア教育プログラムの提供に必要な資金を調達した。これに加え、甲府市が従来から持つ「甲府市ふるさと納税国際交流基金による助成金」の活用も含め、今後もプログラムを継続していく体制を整えている。

4.3 国内就職希望留学生の受入れを促進するためのショートプログラムの実施

委託事業終了後も、プログラムを持続していくための課題として、日本で就職を希望する留学生の継続的な獲得が挙げられる。そこで、JASSOの協定受入れプログラムを申請し、令和5年2月に「研究駆動トラック」への参加を希望するような海外の学生を対象としたショートプログラムを実施した。ここでは、留学生に、日本語教育、日本文化体験、研究室訪問、企業訪問、そして、現地学生との交流の5つのプログラムを提供した。これにより、山梨大学で学ぶイメージ、日本企業に対するイメージを確固たるものとすることで、本学への進学、ひいては就職促進プログラムへの参加を促すことが目的である。本プログラムには、カンボジア、タイ、ドイツから19名の留学生（学部3、4年生）が参加した。

また、ショートプログラム実施にあたり、王立ブノンペン大学と包括的な協定を、カンボジア工科大学と国際大学とはプログラム協定を締結し、就職促進プログラムを含めた今後の連携を確認した。

5. プログラム成果報告と評価

5.1 留学生就職促進シンポジウム

令和2年度11月に文部科学省の委託事業に採択された東京大学、神戸大学との共催で、9月30日に「留学生就職促進シンポジウム」を開催した。

東京大学学術研究センター特別会議室からウェビナーでのハイブリッド開催となり、多くの企業や他大学の皆様にもご参加いただいた。シンポジウムの前半は、3校の取り組みや就職状況の報告や就職促進プログラムに参加した留学生の成果発表、後半は、企業と大学とのパネルディスカッションを行った。



5.2 「留学生就職促進プログラム委員会」における評価

令和2年11月から2年余の文部科学省の委託事業期間の成果報告書が「留学生就職促進プログラム委員会」において確認された。報告書には、本プログラムの事業内容、取り組み事例、申請時の目標の達成度、及び活動の優れた点と課題を示した。委員会からの所見をここに記す。

5.2.1 全体の進捗状況、取組と就職率向上の見通し

【概ね計画通りの取組である】

- ・令和4年度の外国人留学生の国内就職率について、計画よりも少ないもの、令和3年度と比べて大きく回復している。英語コースの大学院生に対しても、渡日前の集中的な日本語教育コース及び企業との共同研究を通じたキャリア教育・企業理解教育を提供しており、このことが国内就職率の増加に繋がっていると思われる。
- ・「留学生就職促進教育プログラム認定制度」の認定を受け、当初計画にはなかった「ポイント制度」を導入し、留学生のプログラム受講の管理及び修了証の発行を実現した点が評価できる。

5.2.2 プログラムの内容の進捗状況

【概ね計画通りの取組である】

ビジネス日本語教育について

渡日前Intensiveコース、夏期、冬期集中コースの設置など学習時間確保への工夫がみられる。また、ビジネス日本語コンテストとインターンシップ報告会を兼行することで、企業担当者が留学生のプレゼンテーションを講評する機会を設け、ビジネス社会における留学生の日本語力の評価を経験的に知る機会を提供し、留学生・企業双方のモチベーションを向上させる工夫をした点が評価できる。一方で、JLPT受験者数が伸び悩んでいるため、今後の対応策の実装を期待する。

キャリア教育について

コンソーシアムや地元企業との連携体制を構築したことで、留学生が産業界で学ぶ機会と体系的なキャリア教育提供を実装している。また、研究駆動留学生も授業外講座で積極的に就職活動に臨めるように工夫している。これらのことが、就職率の大幅な向上に繋がっていると思われる。

インターンシップについて

学生がインターンシップに参加する際に障壁となっている課題を洗い出し、課題解決に向けての立案を行うなど、PDCAが的確に回っている。

その他

企業文化・日本文化理解促進を学内及び近隣大学にも展開している。近隣大学の学生の参加についても、実態把握・課題認識・対応策の検討に努めている。

5.2.3 実施体制の構築、活動状況

【計画を超えた取組である】

- ・本事業に対する学内、外部団体、地方自治体の役割、連携方針が明確であり、評価委員会も設置され効果的に事業が実施されている。
- ・「留学生就職促進教育プログラム認定制度」の認定を受け、事業終了後においても本活動を継続予定である。
- ・特任教員の雇用継続、基金の調達、ふるさと納税枠組の活用、冠奨学金の導入検討などを行っている点が評価できる。

5.2.4 他大学が参考にできる事項等

- ・「英語コース所属学生へのキャリア教育」及び「渡日前日本語教育」に取り組んでいる点。
- ・受け入れ企業参加型のビジネス日本語コンテストとインターンシップ報告会の兼行。
- ・ふるさと納税の活用など、地方自治体との連携。
- ・地域に根差した産官学連携と事業に係るPDCAへの臨み方。

3. その他の活動

(1) 学長からのメッセージとプレゼントの配付

例年この時期に「学長主催山梨大学外国人留学生懇談会」を行っていましたが、今年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、懇談会に代えて本イベントを開催し、留学生及び外国人研究者を励ますこととしました。島田学長からのメッセージと合わせて、果物の詰め合わせをプレゼントしました。



IV. 国際化教育

国際的な環境で勉強できるキャンパスの整備に向け、国際交流センターでは「G-フィロス（グローバル共創学習室）」を中心に、日本人学生と外国人留学生が共に学び、異文化理解・交流を行う機会を数多く設けています。

G-フィロス

グローバル共創学習室『G-フィロス』とは、国際的なコミュニケーションを育成する場として、異文化理解や語学学習を通じ、学生間で互いに学び合う学習環境のことで、日常的には、英語に限らず語学の勉強を学生同士でお互いにサポートするようなサービスを提供し、それ以外にも異文化交流イベントを開催するなどして、学生の学び合う環境を整えています。

1. G-フィロス（グローバル共創学習室）と英語学習・留学サポート

— SA(Student Assistants)による語学サポート・異文化理解と

アドバイザーによる英語学習・留学サポート —

江崎 哲也

1. はじめに

本学では「山梨大学グローバル化に関する基本方針」に基づき、従前の留学生センターの役割を 2014 年度より拡大し、さまざまな国際交流支援活動を通じて本学のグローバル化を総合的に活性化することをミッションとする国際交流センターを設置した。グローバル人材育成に向けての取り組みの一つとして、国際交流センター（2023 年 1 月より国際化推進センター）では、G-フィロス（グローバル共創学習室）の管理・運営⁵と、英語学習・留学アドバイザー⁶による学生の英語学習と海外留学のサポートを行ってきた。ここでは、新型コロナウイルス感染症の影響が拡大してさまざまな制約がある中、全ての取り組みをオンラインに切り替える一方で、感染症の影響が少なくなった際には対面で行った 2022 年度の G-フィロス（グローバル共創学習室）の取り組みと英語学習・留学サポートについて報告する。

2. G-フィロス（グローバル共創学習室）関連の活動

本学工学部では、共創学習支援室「フィロス⁷」が学科の壁を越えた学習交流を促進する特色のある取り組みを行っている。しかし、2014 年度前期まで本学には外国語や自国の文化をお互いに教えあったり共有したりする場（旧留学生センターアネックス、国際交流スペース等）はあっても、なかなか活用されなかった。そこで、国際交流スペース（本学甲府キャンパス B-1 号館 221、Y 号館 2 階）において、国際交流に高い意欲をもち、責任感のある留学生と日本語を母語とする学生を SA(Student Assistant 以下 SA)として配置し、さらに、英字新聞、TOEIC・TOEFL 関連書籍、日本語学習教材、日英語の DVD を配架して日本人学生及び留学生の語学学習の支援を行うとともに、気軽に異文化交流ができる国際的な共創学習支援環境を提供することとした。しかしながら、2021 年度以降は新型コロナウイルス感染症の影響が拡大したため、英字新聞の配架をやめ、図書貸し出しも中止した。表 1 に 2022 年度の G-フィロスの主な取り組み一覧を示す。

⁵平成 26 年度戦略・公募プロジェクトー教育関連プロジェクトー「グローバル人材育成プログラムの実施に向けた国際交流環境整備」（プロジェクト代表者：茅 暁陽）の支援を受けている。本プロジェクトでは、ほかに協定校への海外インターンシップ付き短期留学プログラムの企画と試験的実施、協定校からの学生交流団の受入れを行った。

⁶平成 26 年度・27 年度国立大学法人運営費交付金特別経費「『学長のリーダーシップの発揮』を更に高めるための特別措置枠」による。

⁷ <http://www.eng.yamanashi.ac.jp/risu/kyousou/index.html>

表1 G-フィロス主な取り組み一覧（左端の番号は表2と同一）

	取り組み名	1回あたり 開催時間	頻度/週	1回あたりの配置人数	2022年度実施状況
①	イングリッシュ・カフェ (2~3会場で実施。)	40分	8~10	アドバイザー1 +SA2~3	前期は対面を基本にし つつも週に1回オンライ ン(Zoom)で、後期は対 面で実施。
				本学英語教員1(週3回)	全てオンライン(Zoom)
②	イングリッシュ・サポート	60~90分	10~12	アドバイザー1 +SA2~3	対面で実施
③	英語学習・留学個別相談	30分	時期による	アドバイザー1~2	オンライン/対面で実施
④	TOEIC対策等講座	70分	2~5	アドバイザー1	オンラインで実施
⑤	全学共通科目「総合英語」 履修者対象講座	60~70分	4	アドバイザー1	オンラインで実施
⑧	諸外国語カフェ	60~90分	-	SA1~3	対面で実施
⑨	日本語学習サポート	60~90分	10	SA2~3	対面で実施

3. 英語サポート SA・英語学習・留学アドバイザーの活動

英語学習・留学アドバイザーは、前掲の表1の①~⑤に関わっているが、ここでは利用者が多い①~④について説明する。利用者数については表2を参照のこと。

3.1 イングリッシュ・カフェ、イングリッシュ・サポート

上記①と②では、英語が話せる SA と英語学習アドバイザー、または本学英語教員が、楽しく話すことを目的としたイングリッシュ・カフェを毎日昼休みに開催した。また、夕方には、さまざまな英語のサポートを行った。2022年度のイングリッシュ・カフェ、イングリッシュ・サポート利用者数は、延べ1,939人と新型コロナウイルス感染症の影響を強く受けた2021年度と同程度の利用者数であった。対面に切り替えたものの、まだ影響を受けていたと見られる。

3.2 英語学習・留学個別相談、プライベート英語レッスン

上記③の英語学習・留学個別相談、プライベート英語レッスンは、学生が自律的に英語学習ができるようになることを目的に、本学が2019年度から雇用した英語学習・留学アドバイザーが常時2名態勢で行った。1回30分の枠で、英語学習や留学に関する目標設定や学習計画、動機付け、学習の継続のために必要なことなどについて個別に(1対1で)アドバイスしたり、英語のレッスンをしたりしている。その相談/レッスン内容は、TOEIC®テストやTOEFL®テスト、IELTSなどの各種試験対策から、スピーキングやライティングといった特定の英語スキルの向上について、留学に向けてなど多岐に渡っている。2022年度の相談件数は、延べ1,561件であり、コロナ禍前の数字に戻ってきている。英語学習アドバイザーが学生に対して継続して英語を学習することの重要性を説き続けた結果でもあるが、2019年度2月までは、予約も相談/レッスンも全て対面で行っていたものを、予約はインターネット上でできるようにし、2022年度は相談/レッスンをオンライン(Zoomを使用)か対面か選択できるようにしたことも大きいと思われる。

3.3 TOEIC®等対策講座

上記④のTOEIC®対策講座は、前期/後期に1回70分で複数回行っている。学生が受講しやすいように種々の工

夫をしたが、2022年度の対策講座受講者は、延べ337人と減少に転じた。これ以外にもセミナーを設け（表3参照）、学生が興味を持ち、継続的に英語の学習ができる環境を整えた。

3.5 山梨県立大学学生へのサービス提供

2021年3月に「一般社団法人 大学アライアンスやまなし」が、文部科学大臣より「大学等連携推進法人」の認定を受けたことに伴い、大学間（山梨大学・山梨県立大学）で、連携開設科目の開設や、共同教育課程を設ける場合の各大学の最低修得単位数の引き下げを内容とする教学上の特例が認められた。これを受けて、2021年度から山梨県立大学の学生にも、G-フィロスのサービスの一部を提供し、2022年度も引き続き提供した⁸。利用者数は少なかったものの、本学の学生もよい刺激を受けたようである。

表2 G-フィロス各種サービスの利用者数推移

	取り組み名	延べ利用者						
		2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度 ⁹	2021年度	2022年度
①	イングリッシュ・カフェ	2,317	2,490	2,884	3,906	2,383	1,948	1,939
②	イングリッシュ・サポート							
③	英語学習・留学個別相談	1,625	1,104	1,382	1,111	1,250	1,385	1,561
④	TOEIC 対策等講座	621	881	664	444	467	473	337
⑤	全学共通科目「総合英語」履修者対象講座	635	432	486	647	394	530	336
⑥	教職員向けイングリッシュ・セッション	239	80	27	10	N/A	N/A	N/A
⑦	医学部Cにおける英語学習サポート	156	223	196	111	N/A	N/A	N/A
⑧	諸外国語カフェ	242	215	167	179	N/A	49	248
⑨	日本語学習サポート	593	640	522	639	84	220	410
⑩	英語自律学習ポイントカード	481	591	604	703	426	417	602
⑪	オンライン自習室	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	4,339	N/A

4. G-フィロス関連イベント

G-フィロスでは硬軟織り交ぜて各種のイベントを行っている。表3に2022年度に行ったイベントとその参加人数を示す。イベントの主なテーマはTOEIC[®]、異文化交流、留学の3つである。いずれのイベントも大変好評であり、イベントをきっかけにG-フィロスを利用し始める学生もかなり存在している。また、一部は外部にも開放した。さらに2022年度は前年度に引き続き、本学に入学予定の高校生を対象にしたTOEICセミナーを行い、入学前から英語学習に取り組むことの重要性を伝えた。参加した高校生にとっては、本学の英語学習サポートの手厚さを知ってもらう好機となったようである。

⁸ 山梨県立大学の学生にとってのG-フィロスのサービスは、単位修得には直接関与しない。

表3 2022年度G-フィロス関連イベント

日付	時間	場所	イベント名	人数	内訳 (梨大生)	内訳 (外部)
4月8日	16:00-17:20	A2-12,A2-21	G-フィロス & 英語学習サポート説明会	143	143	
4月11日	14:00-15:20	A2-12,T1-12	G-フィロス & 英語学習サポート説明会	77	77	
4月12日	12:00-13:20	オンライン	G-フィロス & 英語学習サポート説明会	32	32	
4月20日	17:00-18:30	A2-21	スタートダッシュTOEICセミナー	82	82	
6月17日	17:00-18:00	T1-12	外国語カフェ(マレーシア)	29	23	6
6月24日	17:00-18:00	T1-12	外国語カフェ(イギリス)	48	38	10
7月1日	17:00-18:00	Y-11	外国語カフェ(フランス)	46	36	10
7月8日	17:00-18:00	オンライン	超直前! TOEIC®L&R対策セミナー	14	13	1
7月11日	14:50-16:20	オンライン	CS1年生向けTOEIC対策セミナー(Listening)	54	54	
7月20日	18:10-19:10	A2-12	外国語カフェ(中国)	18	18	
7月25日	14:50-16:20	オンライン	CS1年生向けTOEIC対策セミナー(Reading)	55	55	
8月22日	11:00-11:30,17:30-18:00	オンライン	TOEIC®L&Rみんなでボキャブラリーチャレンジ①	23	23	
8月29日	11:00-11:30,17:30-18:00	オンライン	TOEIC®L&Rみんなでボキャブラリーチャレンジ②	21	21	
9月5日	11:00-11:30,17:30-18:00	オンライン	TOEIC®L&Rみんなでボキャブラリーチャレンジ③	13	13	
9月12日	11:00-11:30,17:30-18:00	オンライン	TOEIC®L&Rみんなでボキャブラリーチャレンジ④	14	14	
9月26日	11:00-11:30,17:30-18:00	オンライン	TOEIC®L&Rみんなでボキャブラリーチャレンジ⑤	5	5	
10月19日	16:45-18:15	情報メディア館2階第3実習室	今の力を知ろう! TOEIC®L&R/ハーフ模試	16	16	
10月21日	16:30-19:00	工業会館3階会議室	International Gaming Day!	55	55	
11月16日	17:00-18:00	A2-12	外国語カフェ(バングラデシュ)	43	35	8
11月21日	17:00-18:30	オンライン	超基礎から学ぶ『手取り足取りTOEIC英文法』	7	7	
11月25日	16:30-17:30	A2-12	外国語カフェ(ヨーロッパ)	46	37	9
12月16日	17:00-18:30	工業会館3階会議室	Holiday Party	68	68	
1月12日	17:30-18:30	A2-11	カンボジアカフェ	18	17	1
2月7日	15:00-16:00	オンライン	高校生TOEICセミナー(CS,応化)	20	-	20
2月8日	15:00-16:00	オンライン	高校生TOEICセミナー(CS,応化)	20	-	20
計				967	882	85

5. 「英語自律学習ポイントカード」の配布とTOEIC®/TOEFL®受験料補助

英語を自律的に学習できるようにするため、積極的に上記英語関連サポートや講座に参加した学生に特典としてTOEIC® IP L&R/S&W、またはTOEFL ITP®の受験料のうち3,000円をキャッシュ・バックするという取り組みを行っている。それを管理するために「英語自律学習ポイントカード」を作成し、希望者に配布した。

表2の⑩に示すように、2019年度まで「英語自律学習ポイントカード」発行枚数は徐々に増え続け、2019年度には703枚に達した。しかしながら、コロナ禍においては発行枚数が大幅に減少していた。2022年度は種々の取り組みを行ったため、コロナ禍前の水準(602枚)に戻ってきた。

6. まとめ

グローバル人材の育成に向けて、国際交流センター(2023年1月より国際化推進センター)(では、外国語力、海外体験、異文化と関わる主体性と積極性、自律的語学学習について2014年度より継続的に取り組んできた。この中で本学が2019年度から雇用した語学習・留学アドバイザーの活動は、特に本学学生の英語学習の支えとなり、それがTOEIC等のスコアの伸びや、海外留学者数の増加に大きく貢献してきた。G-フィロス利用者数は順調に伸びてきたものの、コロナ禍では種々の取り組みを大幅に縮小せざるを得なかったため、利用者も大幅に減少した。2022年度は利用者数がコロナ禍前の水準に戻りつつあるものの、完全に学生が戻ってきたわけではない。2023年度以降も取り組みを拡大して、留学生SA、日本語SA、英語学習・留学アドバイザー、英語教員と共にG-フィロスの活性化を図る必要がある。

V. 地域貢献

国際交流センターは、キャンパス内だけではなく、地域全体のグローバル化にも貢献したいと考えています。地元教育機関や自治体など、さまざまな団体のイベントや国際交流事業に留学生を派遣することは、地域貢献だけではなく、留学生に異文化交流の機会を与えることにもつながっています。

留学生の地域との交流

留学生にとって地域との交流は、自らの暮らす地域をよく知り親しむことで安心して暮らすことができるだけでなく、卒業後も山梨に留まり定住するという選択肢を広げるきっかけともなります。新型コロナウイルス感染症の影響により、例年開催されている地域住民の方々と本学留学生との交流を目的とした「こども と おとな と りゅう がくせい の まつり（こおりゅうまつり）」や食を通して異文化への理解を深めることを目的とした「餅つき大会」は行われませんでした。実施された一部イベントにつき報告します。

1. 信玄公祭り甲州軍団出陣「三条夫人隊」への参加

2022年10月29日（土）に信玄公祭りが開催され、本学の留学生が三条夫人隊として甲州軍団出陣に参加しました。参加した留学生たちは、三条夫人隊を模した衣装に身を包み、多くの人々が訪れた甲府の街を練り歩くなど、とても貴重な経験をすることができました。

留学生からは、「盛大でとても賑やかなイベントに参加することができて光栄だった」「日本の伝統的な衣装のすばらしさに驚いた」などの声が聞かれました。

留学生にとって、地域のイベントに参加するというとても貴重な経験になりました。



2. 留学生が甲府市「甲府大好きまつり」に参加

2022年11月5日に開催された甲府大好きまつりで山梨の郷土食ほうとうをテーマ出展するブースに本学の留学生が参加しました。出展ブースでは、今回参加した留学生の母国であるマレーシアの屋台風アレンジしたほうとうを振る舞い、大盛況でした。

自分たちで考案したほうとうを地域の方が「美味しい！」と食べてくださる姿に触れることができ、とても嬉しかったようです。また、一度にたくさんの量を調理する機会も初めてだったため、とても勉強になったとのことでした。地域の方々との交流が楽しいイベントとなりました。



小・中・高等学校への留学生派遣

山梨県内の小・中・高等学校より留学生の派遣依頼があった際、参加を希望する留学生を募集し派遣しています。派遣の要望は主に、国際交流・異文化交流のための授業や行事であることが多く、地域の教育機関の国際交流活動に貢献すると同時に、留学生の異文化体験や日本の教育機関見学の機会にもなっています。今年度の活動は新型コロナウイルス感染症の影響により、ありませんでした。

VI. 国際交流関連データ

留学生在籍状況をはじめ、国際交流に関連する各種データをまとめて報告いたします。

国際交流センターと国際部の行事(2022年度)

年	月	日	活 動 内 容
2022	4	1	就職促進プログラムオリエンテーション(就職促進プログラム)
		4	留学生ガイダンス、日本語プレイスメント・テスト
		8	G-フィロス&英語学習サポート説明会
		11	G-フィロス&英語学習サポート説明会
		12	G-フィロス&英語学習サポート説明会
		13	前期イングリッシュカフェ(12:30-13:00)開始(オンライン*一部対面) 7月22日終了
		19	国際交流会館オリエンテーション
		20	国際交流会館 ANNEX オリエンテーション
		20	スタートダッシュ TOEIC セミナー
		23	学内 TOEIC® L&R IP テスト実施
		26-27	Mirai プロジェクト入社式(就職促進プログラム)
5	5	2	チューター説明会
		9	サポーター説明会
		9	前期イングリッシュサポート(16:30-18:40)開始(対面)7月22日終了
		9	前期 TOEIC 講座(オンライン)開始 6月30日終了
		9	前期総合英語時間外学習開始 7月14日終了
		14	学内 TOEFL ITP®テスト実施
		20・24	夏季オンライン英語・文化研修説明会
		25-27	夏季オンライン英語・文化研修相談会(オンライン)
6	6	8	交流パートナー説明会
		17	外国語カフェ(マレーシア)
		24	外国語カフェ(イギリス)
		2	キャリア分析演習(就職促進プログラム)
		15	キャリアデザイン演習①(就職促進プログラム)
		22	キャリアデザイン演習②(就職促進プログラム)
		29	キャリアデザイン演習③(就職促進プログラム)
7	7	1	外国語カフェ(フランス)
		6	キャリアデザイン演習④(就職促進プログラム)
		7	ビジネスマナー講座1(就職促進プログラム)
		8	超直前! TOEIC®L&R 対策セミナー
		9	学内 TOEIC® L&R IP テスト実施
		11	CS1 年生対象 TOEIC 対策セミナー(Listening)

	13	キャリアデザイン演習⑤(就職促進プログラム)
	15	夏季オンライン英語・文化研修 事前授業
	20	外国語カフェ(中国)
	22	ビジネス日本語能力テスト対策講座(就職促進プログラム)
	24	交流パートナー交流旅行
	25	CS1 年生対象 TOEIC 対策セミナー(Reading)
	29	甲府警察署による留学生のための防犯講話
	30	JASSO オンライン留学生フェア
8	3	日本語日本文化研修生 成果発表会
	9-9/30	留学生インターンシップ(就職促進プログラム)
	9	交換留学事前授業
	17-31	世界展開力ショートプログラム(オンライン)
	22	TOEIC®L&R みんなでボキャブラリーチャレンジ①
	29	TOEIC®L&R みんなでボキャブラリーチャレンジ②
	30-9/16	ケンタッキー大学オンライン英語・文化研修
9	1-	世界展開力中長期留学開始(韓国)
	5	TOEIC®L&R みんなでボキャブラリーチャレンジ③
	12	TOEIC®L&R みんなでボキャブラリーチャレンジ④
	16	日本語プレイスメント・テスト
	21	チューター説明会
	26	TOEIC®L&R みんなでボキャブラリーチャレンジ⑤
	27	サポーター説明会
	30	東京大学・神戸大学共催シンポジウム(就職促進プログラム)
10	3	後期イングリッシュカフェ(12:20-13:00 対面*一部オンライン)イングリッシュサポート(16:30-19:00・対面)開始 1月20日終了
	4	チューター説明会&サポーター説明会
	13	後期総合英語時間外学習開始 12月22日終了
	17	後期 TOEIC 講座(オンライン)開始 11月17日終了
	19	今の力を知ろう! TOEIC®L&R ハーフ模試
	21	International Gaming Day
	15・16	CJCC Study in Japan Fair 2022(オンライン)
	12-14	Mirai プロジェクト中間報告会(就職促進プログラム)
	28	面接対策マナー講座(就職促進プログラム)
	25	国際交流会館 ANNEX オリエンテーション

		27	国際交流会館オリエンテーション	
		29	学内 TOEIC® L&R IP テスト実施	
11	4	4	留学生インターンシップ報告会 & ビジネス日本語コンテスト	
		4	留学生の華道体験	
		11	はたらこやまなしセミナー(就職促進プログラム)	
		18	思いやりマナー講座(就職促進プログラム)	
		12	学内 TOEIC® S&W IP テスト実施 ~11月17日まで	
		16	外国語カフェ(バングラデシュ)	
		21	超基礎から学ぶ「手取り足取り TOEIC 英文法」	
		24	世界展開力中長期留学開始(マレーシア)	
		25	外国語カフェ(ヨーロッパ)	
		21・25	春季海外研修 説明会	
	12	2・6・8	2・6・8	春季海外研修 相談会
		16	Holiday Party	
12-1/30		12-1/30	交換留学・海外研修事前授業(海外で学ぼう-海外研修・交換留学 GatewayII)	
		17	学内 TOEIC® L&R IP テスト実施	
		9	留学生のための就職ガイダンス(就職促進プログラム)	
		12-20	Mirai プロジェクト進捗報告会(就職促進プログラム)	
2023	1	10	世界展開力中長期留学説明会・帰国報告会	
		12	カンボジアカフェ	
		20	留学生雇用促進セミナー	
		13	企業文化セミナー(就職促進プログラム)	
		16	SPI 対策講座①(就職促進プログラム)	
		20	外国人留学生雇用促進セミナー(就職促進プログラム)	
	2	3-12	3-12	世界展開力ウインタースクール
		4	4	学内 TOEIC® L&R IP テスト実施
		5-3/11	5-3/11	ケンタッキー大学英语・文化研修
		6	6	交流パートナー交流旅行
		7	7	入学前教育・TOEIC セミナー(Listening)
		7	7	Mirai プロジェクト成果発表会(就職促進プログラム)
		8	8	入学前教育・TOEIC セミナー(Reading)
		8	8	企業見学会①(就職促進プログラム)
	10	10	業界・企業研究セミナー①(就職促進プログラム)	

	13	SPI 対策講座②(就職促進プログラム)
	14	留学生企業見学会(甲府市)
	14-23	短期語学・文化研修
	15	留学生企業見学会(甲府市)
	16	企業見学会②(就職促進プログラム)
	16	企業見学会③(就職促進プログラム)
	17	卒業生就職体験談会(就職促進プログラム)
	20	SPI 対策講座③(就職促進プログラム)
	21	企業見学会④(就職促進プログラム)
	22	企業見学会⑤(就職促進プログラム)
	23	業界・企業研究セミナーⅡ(就職促進プログラム)
	23-2 6	CJCC キズナフェスティバル(カンボジア)
	24	ビジネスマナー講座2(就職促進プログラム)
	27	SPI 対策講座④(就職促進プログラム)
3	1-9	世界展開カシヨートプログラム
	22	面接対策講座①(就職促進プログラム)
	23	世界展開カ外部評価員会
	28	面接対策講座②(就職促進プログラム)
	29	就職相談会・認定式(就職促進プログラム)
	通年	プライベート英語学習相談・英語レッスン

2022 年度留学生在籍状況(国別) 基準日:5月1日

No.	国・地域 Nationalities	大学院生 Graduate Students		学部生 Undergraduate		研究生 Research Students		科目等 履修生 Partial Students	特別聴講 学生 Visiting Students	計 Total			合計 Total
		国費 MEXT	私費 Private	政府派遣 Foreign Government	私費 Private	国費 MEXT	私費 Private	私費 Private	私費 Private	国費 MEXT	政府派遣 Foreign Government	私費 Private	
1	中華人民共和国 People's Republic of China		75		43		19	1	5	0	0	143	143
2	マレーシア Malaysia	1	11	12	6		1			1	12	18	31
3	ベトナム社会主義共 和国 Socialist Republic of Viet Nam	1	9		4					1	0	13	14
4	バングラデシュ人民 共和国 People's Republic of Bangladesh	6	3							6	0	3	9
5	タイ王国 Kingdom of Thailand		3			1				1	0	3	4
6	ネパール Nepal	1	1							1	0	1	2
7	大韓民国 Republic of Korea				3				1	0	0	4	4
8	インドネシア共和国 Republic of Indonesia	2	1							2	0	1	3
9	ガーナ共和国 Republic of Ghana	3								3	0	0	3
10	スリランカ民主社会 主義共和国 Democratic Socialist Republic of Sri Lanka	2	1							2	0	1	3
11	台湾 Taiwan		1		1					0	0	2	2
12	モンゴル国 Mongolia				1					0	0	1	1
13	英国 United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland								1	0	0	1	1
14	パキスタン・イスラム 共和国 Islamic Republic of Pakistan	1								1	0	0	1
15	ケニア共和国 Republic of Kenya		1							0	0	1	1
16	ナミビア共和国 Republic of Namibia		1							0	0	1	1
17	マダガスカル共和国 Republic of Madagascar		1							0	0	1	1
18	ブルキナファソ Burkina Faso		1							0	0	1	1
19	インド India		1							0	0	1	1
20	南スーダン共和国 The Republic of South Sudan		1							0	0	1	1
21	パナマ共和国 Republic of Panama	1								1	0	0	1
22	ドイツ連邦共和国 Federal Republic of Germany		1							0	0	1	1
22	フランス共和国 French Republic								1	0	0	1	1
23	エチオピア連邦民 主共和国 Federal Democratic Republic of Ethiopia		1							0	0	1	1
	計 Total	18	113	12	58	1	20	1	8	19	12	200	231

受入留学生の推移(過去4年間) 基準日:5月1日

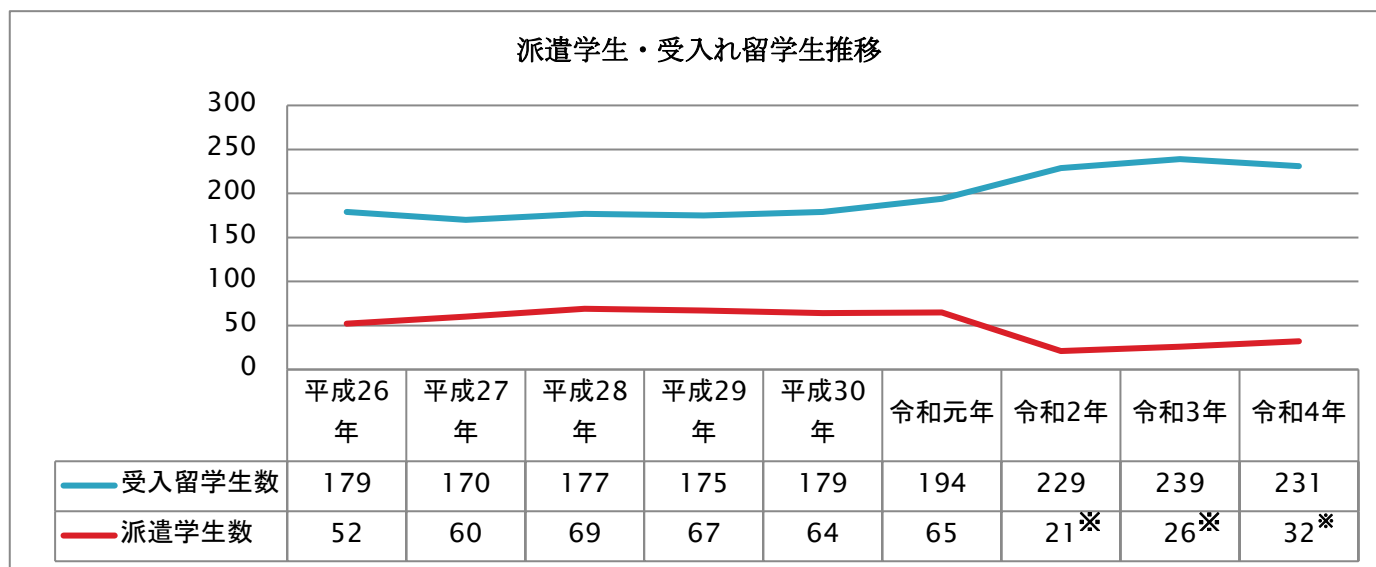
	令和元年度		令和2年度		令和3年度		令和4年度	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院
国費留学生	0	18	0	17	0	16	0	19
政府派遣留学生	16	0	12	0	11	0	12	0
私費留学生	71	89	76	124	90	122	77	123
合計	194		229		239		231	

派遣留学生の推移(過去4年間)

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
交換留学	4	0	0	6
A3I 中長期留学			0	4
夏季・春季海外研修 (海外インターンシップ参加者)	61	21 (オンライン)	26 (オンライン)	22 (うちオンライン15名)
合計	28	0	0	0
	65	21 (オンライン)	26 (オンライン)	32

※令和2年度・3年度、4年度夏季は新型コロナウイルス感染症の影響のため海外派遣実施不可。オンラインにて研修を実施。

<図:派遣学生・受け入れ留学生推移>



※新型コロナウイルス感染症の影響のため海外派遣実施不可。オンラインにて研修を実施。

派遣プログラム

プログラム名	留学先	実地時期	期間	対象学部	備考
夏季オンライン海外研修	米国 University of Kentucky	2022年8月30日(火) ～9月16日(金)	2週間	全学	Center for English as a Second Language (ESL)におけるオンラインプログラムに参加します。本学学生向けの特設クラスにて、スピーキング、リスニングを集中的に学び、コミュニケーションに必要な語学力の習得を目指します。また、語学の授業のみならず、アメリカ文化についての授業や、現地の学生と交流する機会も設けられています。

春季海外研修	米国 University of Kentucky	2023年2月5日(日) ～ 3月11日(土)	5週間	全学	Center for English as a Second Language (ESL)にて、各学生の英語レベルに応じて、各国から来た学生で構成されるクラスにてきめ細やかな指導を受けます。毎日(月～木曜日)リーディング、ライティング、スピーキング、リスニングの各授業にて、コミュニケーションに必要な語学力の習得を目指します。英語の授業のほか、現地学生との交流活動も行われます。
--------	---------------------------------	----------------------------	-----	----	---

奨学金受給者数(私費外国人留学生)

	令和元年度		令和2年度		令和3年度		令和4年度	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院
学習奨励費	5	24	5	12	0	10	0	9
学習奨励費(就職支援特別枠)			8	11	11	10	15	24
学習奨励費(コロナ支援)			6	17	6	8	0	0
(財)ロータリー米山記念奨学会	1	2	1	1	2	0	2	0
朝鮮奨学会		1	1	1	1	1	1	0
(財)共立国際奨学財団					0	0	0	0
日揮・実吉奨学会		1	1		0	1	1	0
山梨大学大学院博士課程私費外国人留学生支援金		5		10	0	15	0	11
甲府市ふるさと応援補助金による大学院博士課程私費外国人留学生支援金		8		8	0	0	0	0

新規協定締結校(2022年度)

	国名・地域名 Country/Region	大学等名 Institution	締結年月日 Agreement date
大学間	ウクライナ	ボリス・グリチェンコ・キーウ大学	2022.10.24
	タイ	マヒドン大学	2023.02.20
	カンボジア	王立プノンペン大学	2023.03.06
	パキスタン・イスラム共和国	ラホール大学	2022.12.06
	マレーシア	ペトロナス工科大学(インスティテュート・オブ・テクノロジー・ペトロナス)	2022.12.07
部局間		カンボジア工科大学	2022.12.20
	カンボジア	国際大学	2022.12.20
		王立プノンペン大学	2023.01.04

JSPS 国際交流事業申請状況

	令和元年度		令和2年度		令和3年度		令和4年度	
	申請数	採択数	申請数	採択数	申請数	採択数	申請数	採択数
外国人特別研究員(一般)	13	1	12	0	9	0	10	2
外国人特別研究員(欧米短期)					1	1		
外国人招へい研究者(長期)							1	1
外国人招へい研究者(短期)							2	
研究拠点形成事業 A							1	
国際共同研究事業	2	1					1	
二国間交流事業(9月)	5	0	3	0	2	0		
二国間交流事業(2月)								
論文博士号取得希望者支援							1	1

JSPS 研究者養成事業申請状況

	令和元年度		令和2年度		令和3年度		令和4年度	
	申請数	採択数	申請数	採択数	申請数	採択数	申請数	採択数
海外特別研究員			1	0			1	
海外特別研究員(RRA)								
若手研究者海外挑戦	3	0	1	0				
日本学術振興会賞	1	0						
日本学術振興会育志賞	2	0					1	

その他国際交流事業申請状況

	令和元年度		令和2年度		令和3年度		令和4年度	
	申請数	採択数	申請数	採択数	申請数	採択数	申請数	採択数
さくらサイエンス	2	2	0	0	0	0	1	1
JASSO(短期派遣)	1	1	1	1	1	1	3	3
JASSO(短期受入)	2	0	3	1	2	2	5	4
JASSO(双方向)	2	0	1	1	0	0	0	0